

上津浦城跡 1

2016

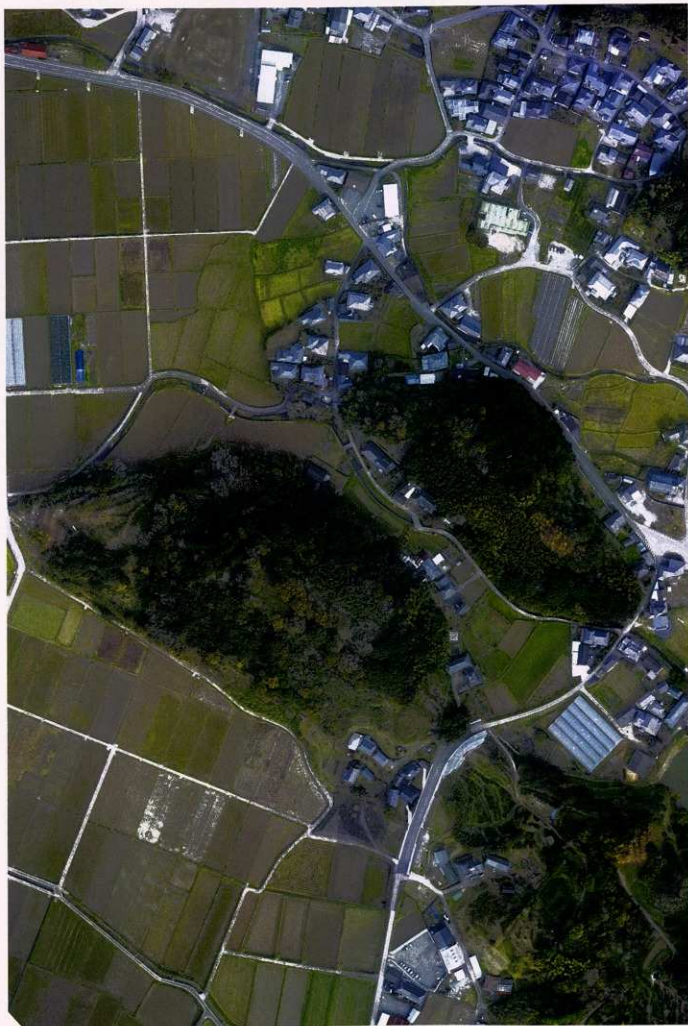
天草市教育委員会



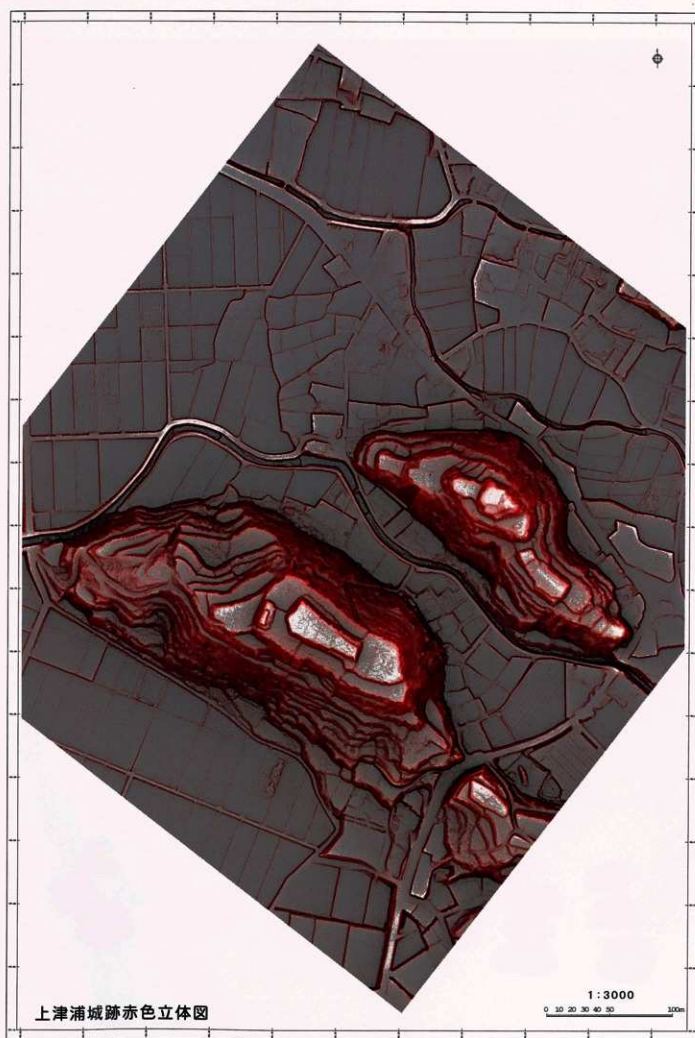
有明海側から見た上津浦城跡（北から）



上津浦城跡航空写真（北から）



上津浦城跡オルソ写真



上津浦城跡赤色立体図

1:3000
0 10 20 30 40 50 100m

上津浦城跡 1



T 0 4 出土 地鎮遺物 (出土状況)



T 0 4 出土 地鎮一括遺物

2016

天草市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、平成24年度から26年度にかけて、天草市教育委員会が重要遺跡確認調査事業として実施した上津浦城跡発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、天草市教育委員会が平成24・25年度に行い、平成26年度は三次元航空レーザー測量による地形測量事業等を実施した。報告書作成作業は、平成27年度に実施している。
3. 調査の実施にあたっては、文化庁国庫補助事業を活用させていただいた。
4. 本書に掲載した座標は、すべて世界測地系に基づくものである。
5. 本書に掲載した遺構実測図、遺物実測図の作成及び写真撮影は、一部を除き担当者が行い、図面トレース作業・採拓作業及び編集作業について、柏木幸美・福田美和子の助力を得た。
6. 城跡詳細地形図、赤色立体図、オルソ写真の作成は、アジア航測株式会社に業務委託した。航空写真の撮影は、九州航空株式会社に業務委託した。T O 4出土動物遺存体の分析は、株式会社バリノ・サーヴェイに業務委託した。正覚寺キリシタン墓群の実測図作成は、株式会社九州文化財研究所に業務委託した。
7. 調査の進捗については鶴崎俊彦氏(熊本城調査研究センター)・岡寺良氏(九州歴史資料館)から調査指導を受けた。城跡縄張り図の作成は鶴崎氏にお願いした。貝類の同定は、鶴岡宏明氏(天草市ジオパーク推進室)にお願いした。
8. 出土遺物のうち、陶磁器類の分類については、以下の文献資料を参考にした。上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」、森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」、小野正敏「15・16世紀の染付碗・皿の分類と年代」(以上貿易陶磁研究会1982より)、瀬戸哲也・仁王浩二・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志「沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀を中心に」(沖縄県立埋蔵文化財センター2008より。本文中では「沖縄分類」と呼ぶ。) 必要に応じて、別の分類・分析例を用いているものもある。
9. 発掘調査によって得られた出土遺物等は、天草市文化財収蔵庫に保管している。
10. 本書の執筆・編集は、中山が行なった。

本文目次

第1章 調査の経過	
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第3節 調査体制	2
第2章 位置と環境	
第1節 遺跡の位置と立地	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 上津浦城をめぐる歴史	6
第3章 調査の成果	
第1節 上津浦城跡の構造	7
第2節 トレンチ概要と出土遺構	10
第3節 出土遺物	26
第4章 動物遺存体および白色物質に関する自然科学分析	
パリノ・サーヴェイ株式会社	39
第5章 正覚寺キリシタン墓碑群の調査成果	
第1節 調査の概要	50
第2節 実測対象墓碑	50
第6章 総括	52
写真図版	
報告書抄録	

挿図挿表目次

図1 上津浦城跡位置図	4
図2 上津浦周辺遺跡分布図	4
図3 上津浦城跡周辺地形図	5
図4 上津浦城跡地形測量図 (S=1/3000)	8
図5 上津浦城跡縄張り図 (鶴嶋俊彦氏作図・S=1/3000)	9
図6 調査トレンチ配置図 (S=1/2000)	10
図7 T01T02 遺構平面図 (S=1/40)	11
図8 T03T04 遺構平面図 (S=1/40)	12
図9 T01～T04 断面図 (S=1/40)	14
図10 T05 遺構平面図断面図 (S=1/40)	16
図11 T06 遺構平面図断面図 (S=1/40)	17
図12 T07 遺構平面図断面図 (S=1/40)	18
図13 T08T09 遺構平面図断面図 (T08 S=1/80 T09 S=1/40)	19
図14 T10 遺構平面図 (S=1/60)	21
図15 T11 遺構平面図 (S=1/40)	22
図16 T10T11 断面図 (T10 S=1/60 T11 S=1/40)	23
図17 T12T13 遺構平面図断面図 (S=1/40)	25
図18 T01～T04 出土遺物実測図 (S=1/3)	27
図19 T01～T04 出土遺物写真	28
図20 T04 出土地鎮一括遺物実測図 (S=1/3)	29
図21 T04 出土地鎮一括遺物写真	30
図22 T05～T10 出土遺物実測図 (S=1/3)	31
図23 T05～T10 出土遺物写真	32
図24 T11 出土遺物実測図 (S=1/3)	35
図25 T11 出土遺物写真	36
図26 ウシ骨格各部の名称	40
図27 白色物質の不定方位法 X線回折チャート	45
図28 白色物質分析写真	48
図29 白色物質分析写真・植物珪酸体顕微鏡写真	49
図30 正覚寺キリシタン墓碑群実測図 (S=1/10)	51
表1 出土遺物観察表1	37
表2 出土遺物観察表2	38
表3 骨同定結果	41
表4 X線回折分析による検出鉱物	43
表5 薄片観察による構成物量比	46

第1章 調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

天草市は平成18年、天草諸島の2市8町が市町合併を行い成立した自治体である。天草上島の旧倉岳町では、合併以前から、戦国時代城郭である棚底城跡の調査・保存に取り組み、合併後の平成21年に国史跡へ指定された。天草市教育委員会は、平成23年度に史跡棚底城跡の適正な保存管理を図るため、「史跡棚底城跡保存管理計画書」を刊行し、その内容に基づいて、現在も保存管理が進められている。同計画書には、第7章として「追加指定に向けた取り組み ～天草諸島における城館遺跡の広域的史跡群の実現に向けて」が記述され、天草市域に残る、天草五人衆関係の城郭について将来の追加指定を目指す計画が公にされているところである。

天草市有明町上津浦に所在する上津浦城跡は、天草五人衆の一人で、天草上島の有明海沿岸に勢力圏を有していた上津浦氏の代々の居城であることが知られていたが、これまで調査などが行われたことがなく、その内容はベールに包まれていた。周知の埋蔵文化財包蔵地ながら、遺跡残存状況は、全くデータが無いのが実態であった。

このような状況に鑑み、棚底城跡と関係性が強く、将来、天草五人衆関係史跡として、一翼を担う可能性がある上津浦城跡の内容解明が希求されることとなった。地元上津浦地区の方々や地権者の方々の理解・協力もあり、市内重要遺跡確認調査の一環として平成24・25年度に発掘調査が実施されることになった。発掘調査の実施にあたっては、ブッシュとなって立ち入りもままならない城跡を、地域団体である上津浦地区振興会に伐採・除草をしていただいた。地域支援の下で調査に入れるありがたさと地元住民の地域文化財への愛着を痛感した。上津浦地区振興会へ深く感謝したい。

発掘調査は、平成24年度は天草市単費で実施したが、平成25年度の発掘調査、平成26年度の各種委託事業、平成27年度の報告書作成は、文化庁の国庫補助事業を活用し実施している。

第2節 調査経過

発掘調査は、平成25年の1月から3月まで南側丘陵（南の城、伝承では本丸跡）の調査を実施し、T01～T07までの7か所のトレンチで掘削を行った。すべてのトレンチで、上津浦城跡のものと考えられる戦国時代の遺構・遺物が検出された。調査終了間際実施した発掘調査現地説明会では、約90人の参加者があった。

翌年度、平成25年12月から平成26年3月にかけて、北側丘陵の発掘調査を行い、T08～T13まで6か所の調査区を設けた。T08を除く5か所から、遺構・遺物が検出され、北側丘陵も南側丘陵と平行する時期に城郭として、機能していたことが明らかになっている。発掘調査終了後の平成26年度は、三次元航空レーザー測量による城郭地形図の作成

と正覚寺キリシタン墓碑群の実測図作成を委託業務として実施した。

第3節 調査体制

上津浦城跡発掘調査における調査組織体制は、以下のとおりである。

平成24年度（第1次発掘調査 南の城調査）

事業主体 天草市教育委員会

事業責任者 天草市教育委員会教育長 岡部紀夫

調査総括 天草市教育委員会文化課長 嶋田千代樹

庶務担当 天草市教育委員会文化課文化財保護係長 福本英樹

調査担当 天草市教育委員会文化課文化財保護係学芸員 中山 圭

発掘調査作業員 橋本和博、五嶋徳隆、井上隆、宮崎かおり、稲津啓一、溝畑一光

平成25年度（第2次発掘調査 北の城調査）

事業主体 天草市教育委員会

事業責任者 天草市教育委員会教育長 岡部紀夫

（組織改編により文化課が教育委員会から市長部局へ移行。）

調査総括 天草市観光文化部文化課文化課長 田中耕三

庶務担当 天草市観光文化部文化課文化振興係長 福本英樹

調査担当 天草市観光文化部文化課文化振興係主査 中山 圭

発掘調査作業員 橋本和博、柴田邦雄、井上隆、宮崎かおり、稲津啓一、溝畑一光

平成26年度（地形測量等委託事業執行）

事業主体 天草市教育委員会

事業責任者 天草市教育委員会教育長 石井二三男

調査総括 天草市観光文化部文化課 文化課長 山本智保子

庶務担当 天草市観光文化部文化課文化振興係長 福本英樹

調査担当 天草市観光文化部文化課文化振興係主査 中山 圭

平成27年度（報告書作成）

事業主体 天草市教育委員会

事業責任者 天草市教育委員会教育長 石井二三男

調査総括 天草市観光文化部文化課文化課長 山本幸伸

庶務担当 天草市観光文化部文化課文化振興係長 赤星潤一

調査担当 天草市観光文化部文化課文化振興係主査 中山 圭

整理作業員 柏木幸美、福田美和子

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と立地

天草市は、九州西海岸の中央に位置し、周囲を有明海・八代海・東シナ海に囲まれた天草諸島に所在する。中心となる天草下島、天草上島は天草諸島で第1、第2の大きさを誇る島で、他に御所浦島なども加え、市域は683km²と熊本県下最大である。美しい海洋景観による風光明媚な地域である。

上津浦城跡は、天草上島の中央北側に立地し、行政区分上は、熊本県天草市有明町上津浦に所在する。

天草上島を代表する山である老岳（標高590m）は、島の分水嶺の一つであるが、その老岳を起点として、西側へは追伝いに上津浦川（谷合川）が流れ込む。上津浦川が、平野部へ到達した地点周辺が、上津浦の中心部となり、上津浦城跡もその集落付近の低丘陵に立地している。上津浦地区の平野は、袋状の干拓地を成し、近世に干拓が行なわれるまでは、海水が浸入し、入り江を形成していたものと考えられる。このため、上津浦川も、潮の干満により、海水が遡上する様子が見られる。このような現象や地形から、少なくとも上津浦城が機能していた戦国時代頃までは、城間近に海が迫っており、上津浦川は上津浦城付近で海に注ぎ込んでいたものと考えられる。

上津浦城が位置した旧上津浦湾は、大規模な干拓が行われているため、喫水は深くないと考えられるが、西北部の狭隘な湾口を除けば、四方を丘陵に囲われており、風除けには最適であり、往時は良好な港湾として機能したであろうことがうかがえる。同様の干拓地は、上津浦西南の下津浦地区にも形成されており、干拓が盛行する以前は、複雑で起伏に富んだ海岸線を成していたものと推測される。

上津浦城跡を含む天草上島は、島嶼らしく、山稜が卓越した地質であり平野が少ない。その地質は、教良木層をベースとして成り立っており、丘陵は頁岩を主成分としている。城跡でも、至る所で頁岩が露頭し、風化した状況を取ぞできる。

第2節 歴史的環境

上津浦城跡周辺では、上津浦城跡の範囲と重複する谷合遺跡、下津浦の中越遺跡、通山遺跡、引陣遺跡などの丘陵斜面から、縄文時代の石罫、チップなどが採集され、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されているが、遺構の内容等の実態はほとんど解明されていない。また、上津浦と下津浦を隔てる丘陵の先端部に、権六古墳があるが、主体部が箱式石棺であることは確認されているが、詳細な規模や構造は不明である。古代以前の上津浦地域の歴史は、いまだに不明瞭な部分が多く、今後の遺跡内容把握が望まれる。



図1 上津浦城跡位置図



1 上津浦城跡 2 上津浦五輪塔 3 正覚寺キリシタン墓碑 4 美ノ越海岸遺跡 5 タッチョン迫遺跡 6 谷合遺跡 7 妙楽寺跡 8 通山遺跡 9 中越遺跡 10 引陣遺跡 11 権六古墳 12 聖地彦山遺跡 13 小島子城跡

図2 上津浦周辺遺跡分布図



図3 上津浦城跡周辺地形図

第3節 上津浦城をめぐる歴史

天草五人衆の一人、上津浦氏は、筑前原田氏の出自とされる。元徳元年(1329)の文書に上津浦次郎太郎入道という名が見られることから、14世紀前半には、上津浦に拠点を用意していたことがわかる。

南北朝時代の至徳4年(1387)、南朝方の良親親王が相良氏に宛てた軍忠状に「天草郡上津浦若狹入道城後巻の時、忠節致した事」とあり、上津浦城は、14世紀後半には機能していた可能性が高い。15世紀代の状況は、史料の少なから明瞭ではないが、文安5年(1448)には、上津浦種和が近隣の妙楽寺に罅口を奉納している。

明応10年(1501)、菊池武運からの書状は「天草一揆中」宛となっており、天草の各領主が対外的には領主連合的性格を有していたことがわかる。その対応を天草の領主8氏が集まって協議しており、参集領主は、上津浦氏の他、志岐氏、宮地氏、天草氏、長島氏、大矢野氏、栖本氏、久玉氏であった。このうち、上津浦・栖本・志岐・天草・大矢野氏が後に天草五人衆となる。

16世紀には、天草諸島内での戦いが激しくなったことが、八代日記から読み取れる。天文元年(1532)、上津浦治種は相良氏と同盟し、天草・志岐・栖本・大矢野・長島氏の連合と戦っている。7月9日の八代日記に「上津浦之城つめ候」とあることから、上津浦城の守備に相良氏があたっていることが理解される。

天文12年(1543)、上津浦千手が家督儀渡で、相良氏に便送り、同年、上津浦孫次郎が、相良義滋から右衛門大夫の官途を受けている。千手と孫次郎の関係は不明ながら、翌天文13年(1544)2月に相次いで「上津浦親類中、棚底下城」「上津浦親類中、上津浦下城」「種教、上津浦下城」という記録が見られ、天草上島南部の棚底城まで含めた家内紛争をうかがわせる。この「棚底下城」の後、棚底城は栖本氏の所有となり、1550年代には上津浦氏と栖本氏の戦いが激化する。天文20年(1551)、上津浦重貞は島原半島の有馬氏と同盟し、相良氏と手を組んだ栖本を攻撃している。この時、有馬から大野・安徳等の武将が渡海し「栖本に備候間、其留守番也」と記載があることから、やはり上津浦城を他勢力に預けているようである。戦いは長期化し、天草上島の各地で頻繁に合戦が行われたが、永祿3年(1560)の栖本城合戦がピークとなった。この戦いでは、有馬・大村・松浦・相良など西海の諸勢力が集結し、松浦氏の鉄砲隊が派遣されたことが判明している。

天正7年(1579)、天草五人衆はそろって島津氏に降り、島原や豊後へ転戦していくこととなり、島内抗争は下火になった。天正18年(1590)、重貞の子息種直は、小西行長の統治下で、キリシタンとなり、領民3500人とともに改宗したことが宣教師の記録で伝えられている。上津浦は、天草諸島で、最も遅れてキリスト教が広まった地域となった。上津浦には、畿内を追われた三箇マンショが落ち延びるなどキリスト教が急速に浸透したが、小西行長の没落とともに上津浦氏も地域を追われたと思われる。上津浦城は廃城となったと思われるが、寛永14年(1637)の天草島原一揆の折には「俄に風形を作り、柴垣、杉垣結構し」と蜂起した一揆勢の拠点として利用されたという記録が見られる。

第3章 調査の成果

第1節 上津浦城跡の構造

上津浦城跡は、標高47.3mの南側丘陵及び標高46.3mの北側丘陵から形成される。従来の伝承等では、南側が伝本丸、北側が伝二の丸と言われているが、本報告書においては、それぞれ「南の城」「北の城」と呼ぶことにする。

南の城がある南側丘陵は、老岳から西向する派生尾根の先端部に位置し、尾根とは、現在県道により堀切られ、隔絶している。県道より東側が菩提寺である妙楽寺跡であると目される。北の城は、標高はほぼ同じながら、南の城より一回り小さく、独立丘陵である。南北丘陵の間には、上津浦川が流れ、地形上は分断されているのが特徴と言えよう。

南の城は、最高所が方形形状の平坦面となり（曲輪1-1）、主郭と目される。周囲からは、およそ高さ6mほどの切岸で独立している。東側の両端部には、段落ちがあり、入り口になると考えられる。曲輪1-1の塁線は直線的で、特に北西角部では直角に折れるような平面形状を見せる。塁線が直線的であることは、北側の帯曲輪1-3に残る通路的な高まりからも確認でき、切岸形成と関係する遺構であろうと思われる。曲輪1-1は、帯曲輪1-2、1-3、曲輪1-4などによって周囲がまとめられている。主郭の周囲を帯曲輪で一つにまとめる城づくりの特徴は、天草諸島の中世城郭では通有に見られる縄張り構造といえよう。東側の曲輪1-4は広い面積を跨る曲輪で、建物等の利用に適しているように見られる。1-4東端には若干の土塁が残る。さらに東へは、尾根伝いに急傾斜となり、20mほど下がった場所に曲輪1-6があり、県道の堀切に繋がる。

帯曲輪1-2は西端部に、高さ約6m、幅約10m、長さ約20mの土塁状の高まりがあり、その南側に曲輪1-5と連結する細い坂道がある。曲輪1-5から南の城中心部にかかる場合に、横矢掛かりなどとして機能する可能性がある。曲輪1-5より西側は、東西に細長い平坦面が段状に残るが、植林がなされており、後世の造作の可能性が高い。帯曲輪1-3の北側には、堅堀が見られる。以上のような状況から、南の城は、曲輪1-1、1-2、1-3、1-4の中心部に主体性があり、規模の差はあれど、東西両端に残る土塁により防御されているように見受けられる。

北の城は、最高所である曲輪2-1から、東西方向へ尾根伝いに曲輪を連ねる構造である。西側の曲輪2-2は、上津浦の袋状の開き口から海を望むことができるロケーションで、周囲から、舌状に独立していることから、主要な建物などの存在が考えられる。曲輪2-1の東側は曲輪2-4があるが、削平はやや甘いように見られる。これらの曲輪を南側の帯曲輪2-3が連結している。北側は細い通路が残るのみで、帯曲輪とはいかない。曲輪2-2は、曲輪2-5と切岸で隔てられ、その比高差は約8mと、切岸を重視する天草の中世城郭の中でも、特に立派な造りである。曲輪2-2の重要性の高さが考えられる。曲輪2-7は、小規模な曲輪ながら、方形平面を成し、区画性が感じられる。曲輪2-4との間に、

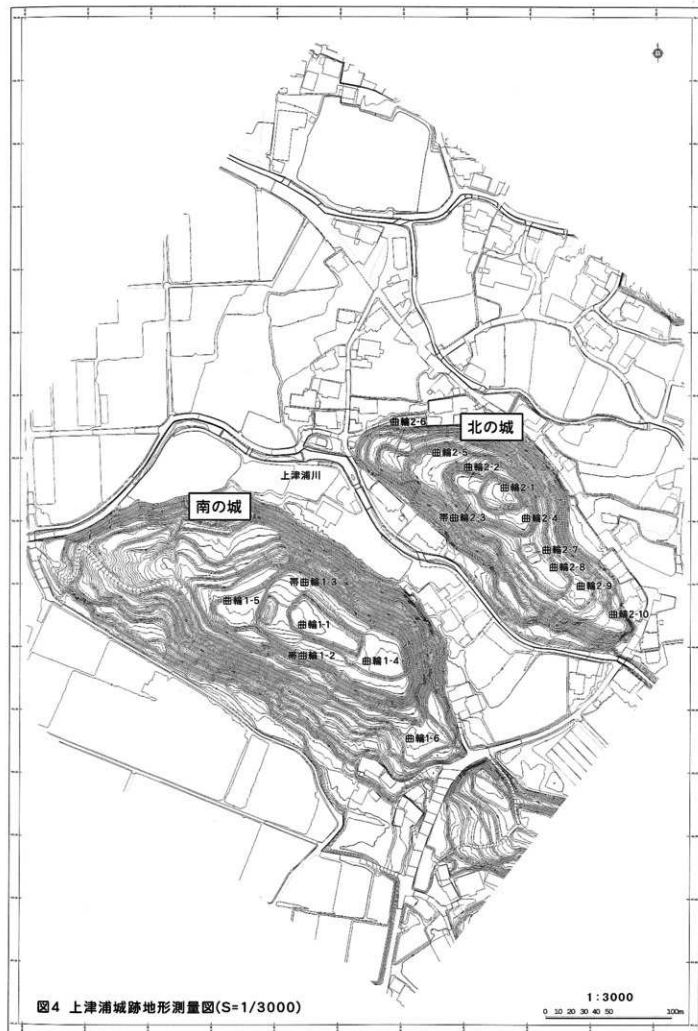


図4 上津浦城跡地形測量図(S=1/3000)



堀切状の凹みが見られる。東側へは曲輪 2-8、2-9 と連なるが、曲輪 2-9 からは、尾根の両端を通る通路状の平坦面が曲輪 2-4 下まで走っており、曲輪 2-4・2-7 の間の凹みとも連絡する。この通路があることから、尾根上を通らずとも、曲輪 2-4 まで連絡できるため、曲輪 2-7・2-8 等の防御上の意義はやや薄いように思われる。北の城は、南の城よりも防御性が高い曲輪配置のように見られるが、やはり曲輪 2-1～2-4 までの中枢の曲輪が重視され、その防御が、岸の比高によって保たれているような構造に見られる。

上津浦城跡は、並列する南北両丘陵の城郭が、それぞれに中心部を重視する構造になっていると考えられる。この両丘陵の性格が、対峙勢力による別城郭か、あるいは時期差があるのか、一連の縄張りとして機能していたか等を検討する必要がある。

第2節 トレンチ概要と出土遺構

(1) 平成 24 年度の調査トレンチ

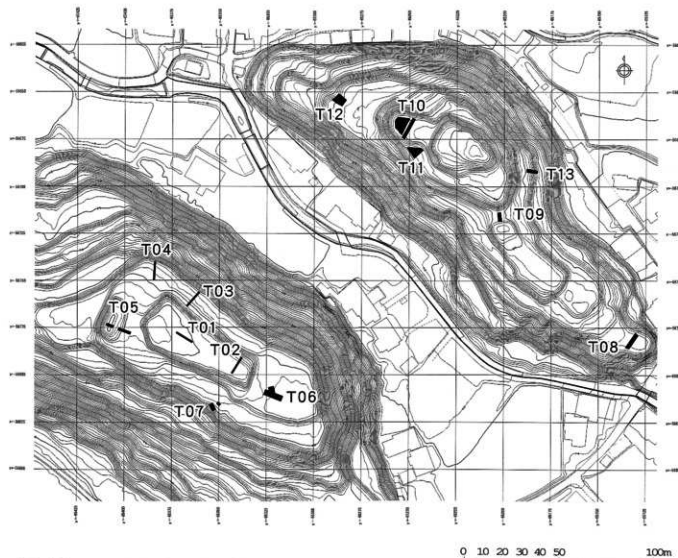
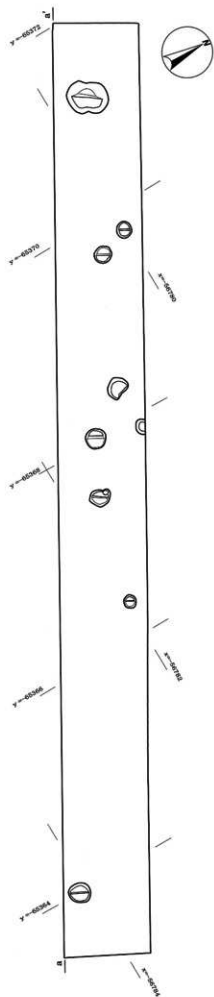


図6 調査トレンチ配置図 (S= 1/2000)

T01



T02

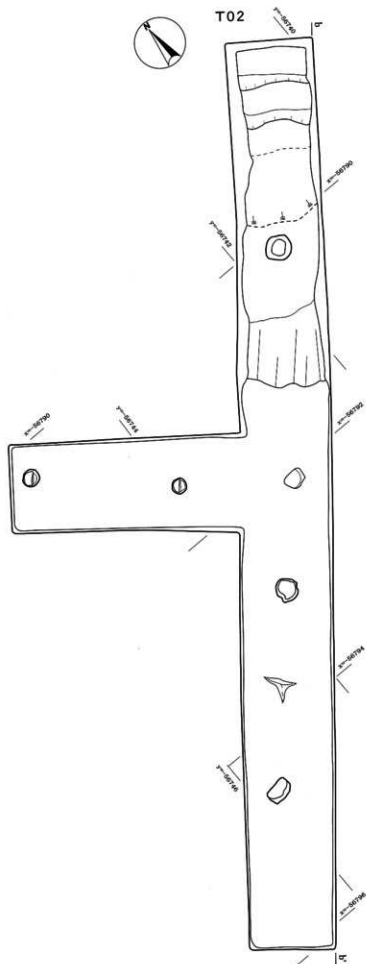
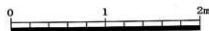
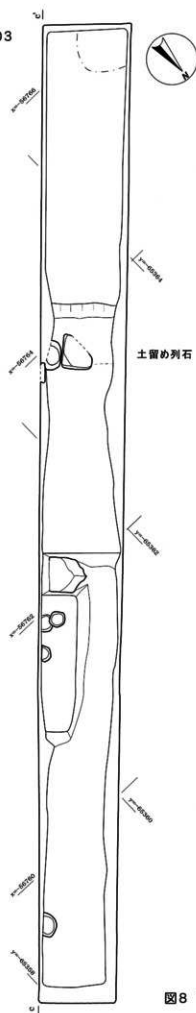


図7 T01T02遺構平面図 (S=1/40)



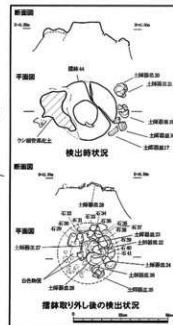
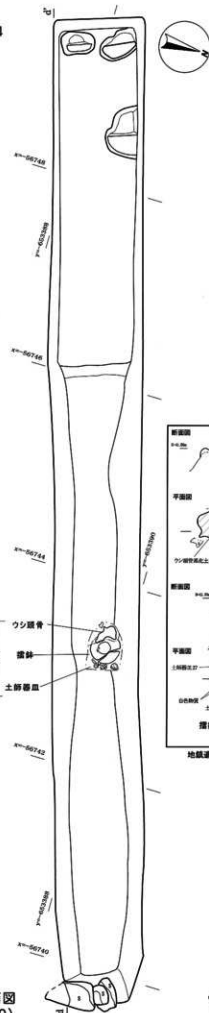
T03



地鉄遺物
 土師器皿
 土師器鉢

図8 T03T04遺構平面図 (S=1/40)

T04



地鉄遺物出土状況詳細図 (S=1/20)



T01

曲輪 1-1 の中央に長さ約 10m、幅約 1m で設定した。地下約 10cm 程度で、岩盤の削平面が検出され、その岩盤面から小型のピットなどが検出された。岩盤の凹む部分は、土を充填し、整地している。

T02

曲輪 1-1 の東側に長さ約 10m、幅 1m で設定し、その後、西側に拡張した。掘削後すぐ岩盤となり、小ピットと礎石状の偏平石を確認した。北側の段落ち部分は、テラス状に削平されているが、土師器粒を含む層が表面層であり、中世段階から段落ちが形成されていることが確認された。このため、曲輪 1-1 東北端の段落ちは、曲輪への入り口通路である可能性が高い。

T03

帯曲輪 1-3 の堆積状況と通路状の高まりを確認するために設定。曲輪 1-1 切岸下の通路状高まりは、切岸削りだしによって出た廃土を盛った可能性が高いと思われる。土留めに用いたとみられる石列も確認された。

T04

帯曲輪 1-3 の西北部の状況を見るために掘削。地下約 10cm で、にぶい黄褐色の整地層を検出し、その直上で、青花E碗(遺物番号 12)が出土した。北半分で、この整地層の下層を確認するために、深掘りを行ったところ、大小の頁岩礫による造成層が厚く堆積していた。表土下約 80cm で、やはり黄褐色の整地層を検出した。このため、2度の整地が行われたことが確認された。岩盤礫による曲輪の造成(かき上げ)が行なわれたものと推測される。

トレンチ北側で、この礫層中(3・4層)から、地鎮の一括遺物が出土した(遺物番号 17~44)。伏せた完形の瓦質播鉢を中心に、南側には歯片・骨片を含むクリーム色の土が部分的に見られ、北側に投棄されたとみられる土師器小皿が数点残っていた。第4章に掲げた分析結果のとおり、この歯はウシであることが判明し、ウシの頭部を播鉢付近に横たえたものとみられる。播鉢除去後、内部には、さらに数点の土師器小皿と 10 数点の板石が見られ、白い粉末状の有機物が降りかかった状態で出土した。白色有機物も分析を行ったが、植物質で、稲わら等の灰のような物質である可能性が確認されている。板石は、土師器小皿の底に敷くような位置関係のものが多かった。

出土状況から、造成時の地鎮遺物である可能性が高い。土師器小皿で飲酒後、板石とともに投棄し、灰を降りかけた上で、播鉢をかぶせる。播鉢は、使用痕から日常生活で使用したものを転用したと見られる。さらに、その脇にウシの頭骨を擗げたと考えられる。狭いトレンチ内での検出であったため、遺構としての状況は不分明であるが、下部整地層よ

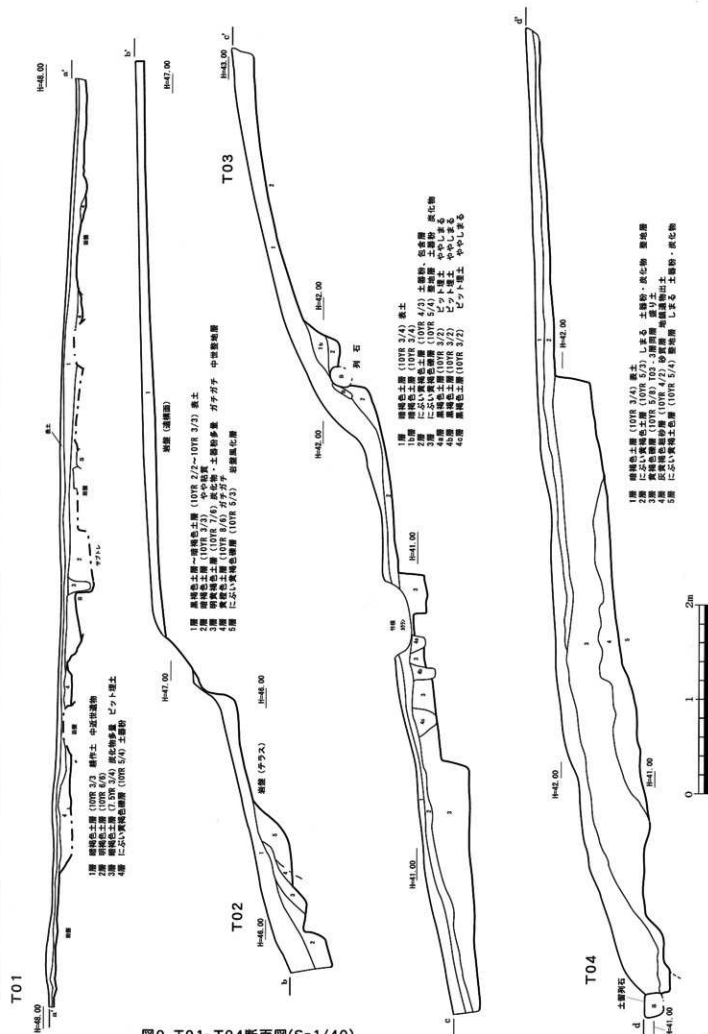


図9 T01-T04断面図(S=1/40)

り浮いた状況での出土であるため、造成時の祭祀である可能性が高い。このため、地鉄遺物と判断した。上部整地層で、青花E碗が出土していることから、造成層は15世紀頃に形成された可能性があり、地鉄遺物は15世紀以前の一括遺物として捉えることができよう。

T05

帯曲輪1-2及び西側の高まりの内容を確認するため、長さ12m、幅2mの規模で掘削。急傾斜部の発掘は避けたため、1-2の平面部(T05-1)と高まり頂部(T05-2)の2か所に分かれるトレンチとなった。T05-1では、黄褐色の整地面(層)から、土坑が検出された。南側の壁面サブトレでは、地山(岩盤)の削平状況を確認した。T05-1の西側付近では、焼土層が堆積し、この状況は、黄褐色整地面の下層でも確認している。土坑からは被熱した青磁碗(遺物番号50)が出土している。西側の高まりは、立ち上がりから、地山の削り残しと考えられる。T05-2の頂部では、削平の甘い平場が残り、青磁盤(遺物番号52)などの中世遺物も出土し、城時代に形成されていたことが明らかになったが、柱穴等の遺構は検出されなかった。

T06

広い面積の曲輪1-4で、建物跡等の検出を目的に設定したトレンチ。調査の結果、5間×3間の掘立柱建物跡SB101を検出した。当初地形に合わせて、西北から東南へトレンチを掘削し、柱穴の検出後、南北方向に拡張トレンチを追加している。

各遺構は、概ね径50cm前後の楕円形掘方の中心に、径20cm前後の柱穴が見られた。12基の柱穴のうち、4基を半裁したが、深さはいずれも20cm程度と浅い状況であった。各層方から遺物が出土しなかったため、遺構の年代は決め難いが、遺構面直上から青花C(D)碗(遺物番号56)や基督底皿(遺物番号57・58)が出土したことから、15世紀後半～16世紀前半の可能性が考えられる。柱間隔は2m程度ながら、北側2基は南側柱穴との間隔が2.4mになる。SB101は、南側以外には規模が延長するものと思われる。

T07

帯曲輪1-2の南側崖面付近に設定した。T07-1・T07-2の2か所を掘削したが、主に遺構が見られたのは、T07-2である。T07-2は北東から南西へ中世層が傾斜し、その基部に安山岩系の自然石を土留めとして列石状に配置している状況が検出された。さらにその南西、城外側にもう一列、列石を配置し、2列の列石間が細い通路として、緩やかな登り坂となっている状況であった。通路は城外側の列石に沿って、西から南方へ向かう。列石の端部は、幅約1m分のみ、4段程の石積となっている。石積の最下段から下は、褐色の10層が露出していた。石積は、自然石を主とするが、半分が割った石材の割面を露出させている部分も見られた。石積の間隙は、10層が湿り、純粹に石材相互による石積

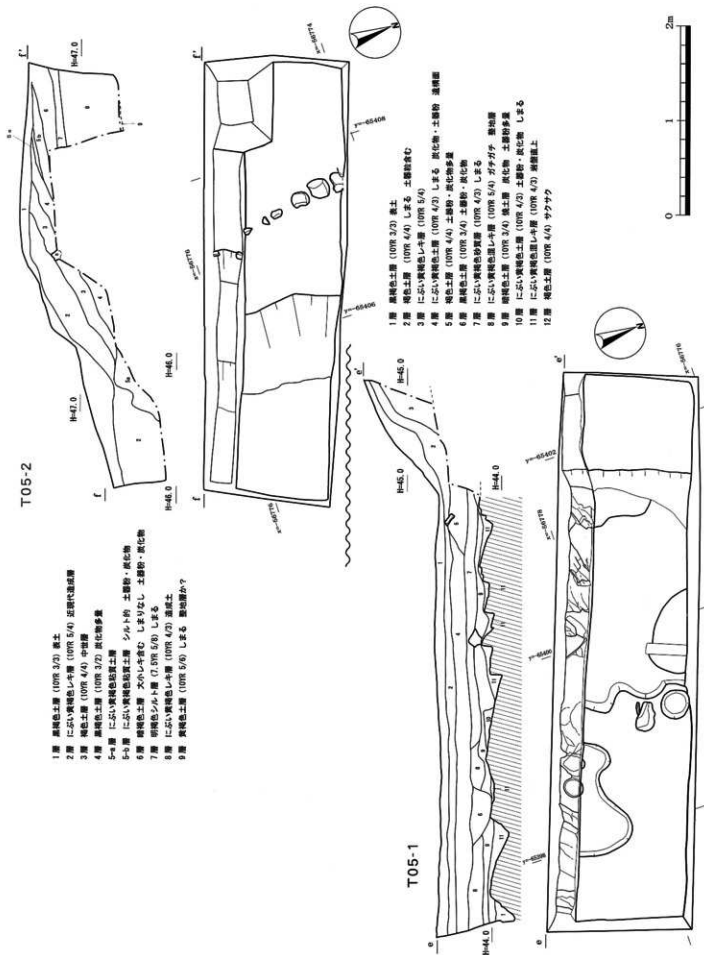
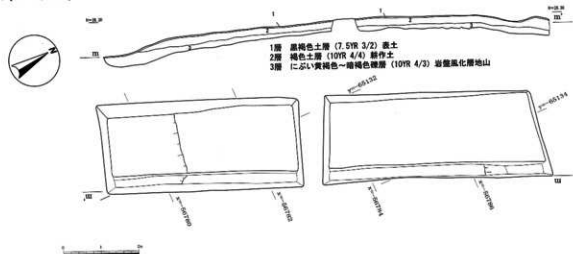


図10 T05遺構平面図断面図(S=1/40)

T08(S=1/80)



T09(S=1/40)

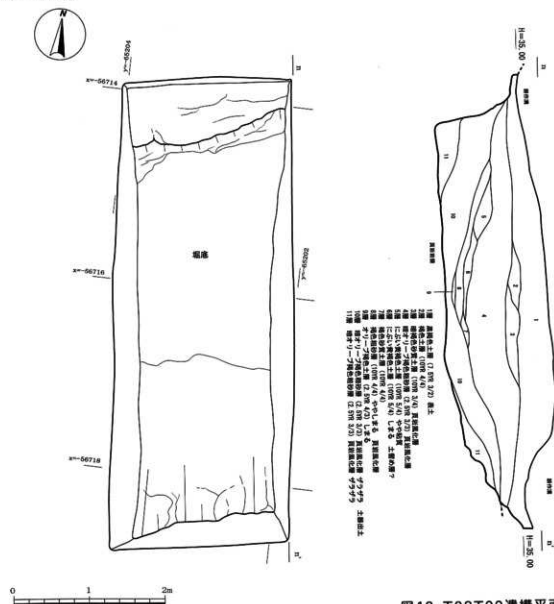


図13 T08T09遺構平面図断面図
(T08 S=1/80・T09 S=1/40)

ではない状況であった。中世城郭の石積事例として注目されるが、目的は城外崖面の土留めであることは明白である。トレンチ内1層から、青花瓶(遺物番号62)が出土している。

(2) 平成25年度の調査トレンチ

T08

南の城境東部の尾根線上に、設定し掘削したトレンチである。尾根を横断する方向で、掘削を行ったが、すぐに地山に到達し、遺構が見られなかった。

T09

曲輪2-4東下に設定したトレンチで、岩盤を掘削して構築した空堀を検出した。尾根線に直交し、尾根の連続を断ち切る堀切になるが、曲輪2-8北側の段と同レベルになり、底部が平坦なことから、通路としても利用されたものと思われる。

検出した堀の肩部幅は約450cm、底部幅は約260cm、深さは地表下約100cmで、断面台形状の箱堀である。

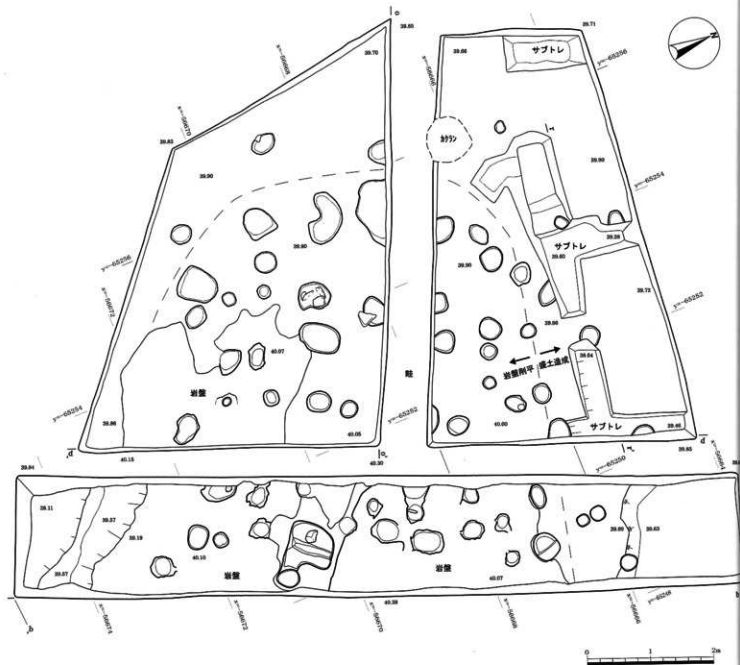
T10

曲輪2-2に設定した調査区。曲輪2-2は、北の城で2番目の高所平坦部であるが、海側へ舌状に迫り出し、西側と高い切岸で隔てられていることから、館等の存在が推定された。当初、幅2mで曲輪を横断するトレンチを設定し掘削したところ、削平された岩盤を掘り込むような柱穴が検出されたため、調査区を海側に拡張し、広めの調査区とした。曲輪2-2の東半部は、保護のため、未掘削である。

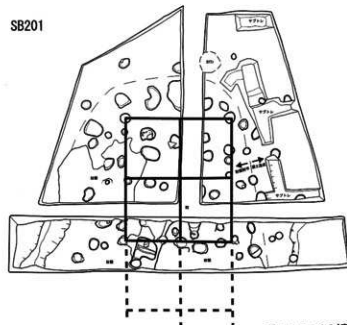
調査区の東から南にかけては、削平された岩盤が検出され、北側は盛り土で曲輪面が造成されている検出状況であった。北側の盛り土層は、サブトレで確認する限り、緩傾斜の整地層7層上に、4層が盛り土され岩盤遺構面と同一レベルで拡張されている。4層中からは遺物が少なかったが、青花C碗(遺物番号74)が出土しており、このことから造成は15世紀後半から16世紀前半の間に実施され、曲輪面積の拡大が図られたのではないかと考えられる。

ピット・土壌は、調査区から大小60基以上検出され、略円形のものが多いが、岩盤掘削によるため、形状はまちまちである。西側の曲輪先端部では、検出数は少なかった。

検出された柱穴の並びから、SB201とSB202の掘立柱建物跡の復元ができた。SB201は検出分で2間×2間の建物跡で、柱間規模は約1.8mとなる。ただし、中軸線上の柱穴は、土層用の畦に隠れる形になるので、復元検討には不十分な点がある。SB202は検出分2間×3間の建物跡で、北側の柱穴は盛り土造成による拡張部分(4層)にかかる。柱間は1.8~2.0mである。このことから、15世紀頃のSB201より大きな建物とするため、16世紀前後に盛り土によって曲輪の北側への拡張が行なわれ、その後SB202が造られたと考えられる。いずれの建物跡も、東側へ延長するものであろう。



SB201



SB202

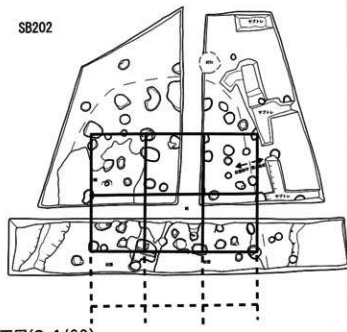
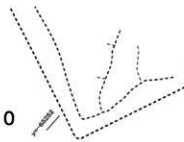


図14 T10遺構平面図(S=1/60)



T 10



T 11

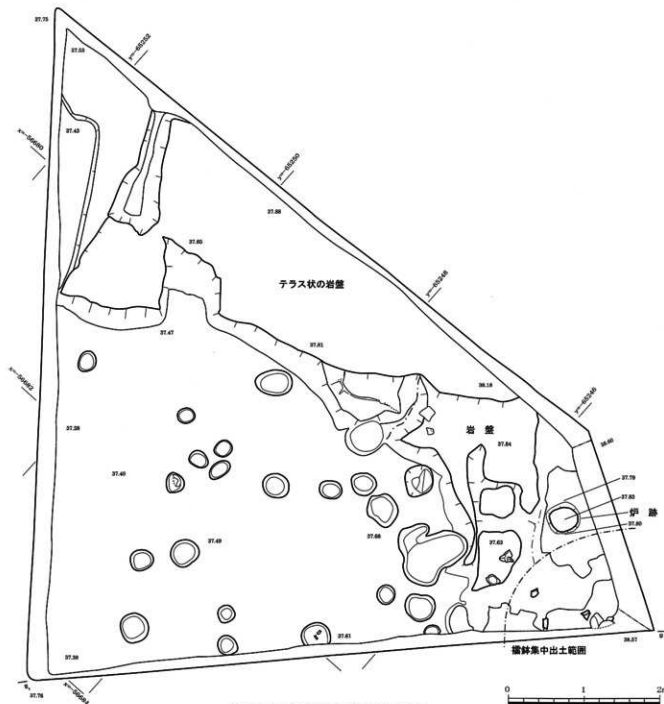


図15 T11遺構平面図(S=1/40)

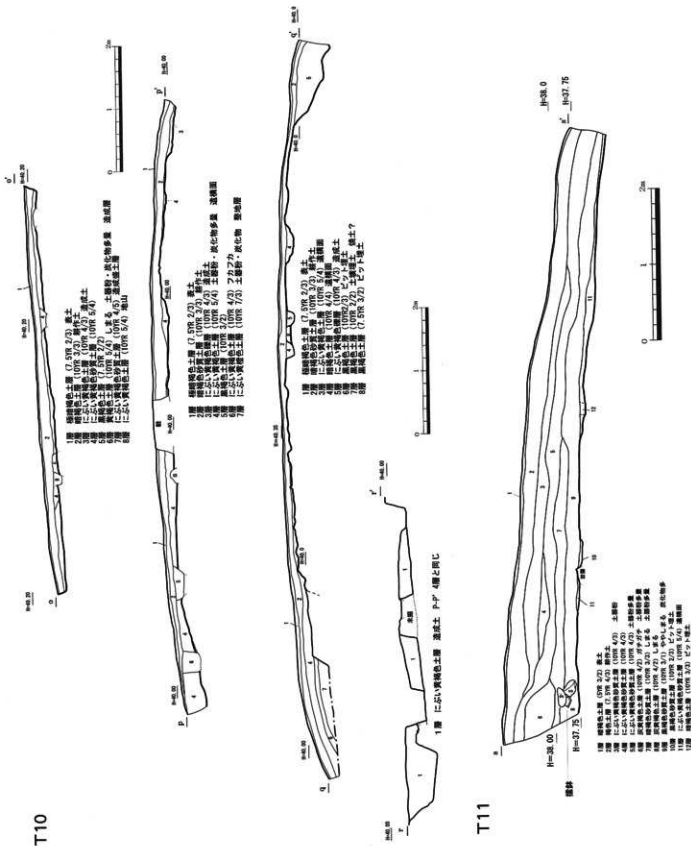


図16 T10・T11断面図 (T10 S=1/60・T11 S=1/40)

物の方位は、おおよそ西から東となるが、曲輪の立地に規定され、曲輪の墨線と平行である。

T11

曲輪2-2の南側段下、帯曲輪2-3の西端に設定した調査区。帯曲輪2-3における横溝や通路の存在を想定して掘削したが、ビット等の遺構が検出された。

トレンチ北側は、曲輪2-2から下った岩盤が出土し、テラス状に削平されていた。その南側には、20数基のビットが検出されたが、建物跡プランの復元には至らなかった。トレンチ東端の壁際付近で、熱により赤変した径22cmの円形遺構1基を検出した。周辺には炭化物や焼土が豊富に見られたため、この遺構は伊跡と考えられる。

伊跡よりさらに東側のトレンチ壁近くでは、多様な播鉢の破片が集中して見られた。未報告分も含めて10点程度の破片が、伊跡周辺で出土している（遺物番号98～102）。また、ウミギク、ヤコウガイなどの貝殻類も、T11北東部を中心に出土した。食糧残滓と考えられよう。

その他、中世須器甕（遺物番号97）、備前焼口縁部（遺物番号95）、中国もしくは東南アジア産とみられる焼き締め陶器（遺物番号93）、酒器と思われる被熱白磁瓶（遺物番号86）等、内容物を伴ったとみられる貯蔵用遺物が出土している。

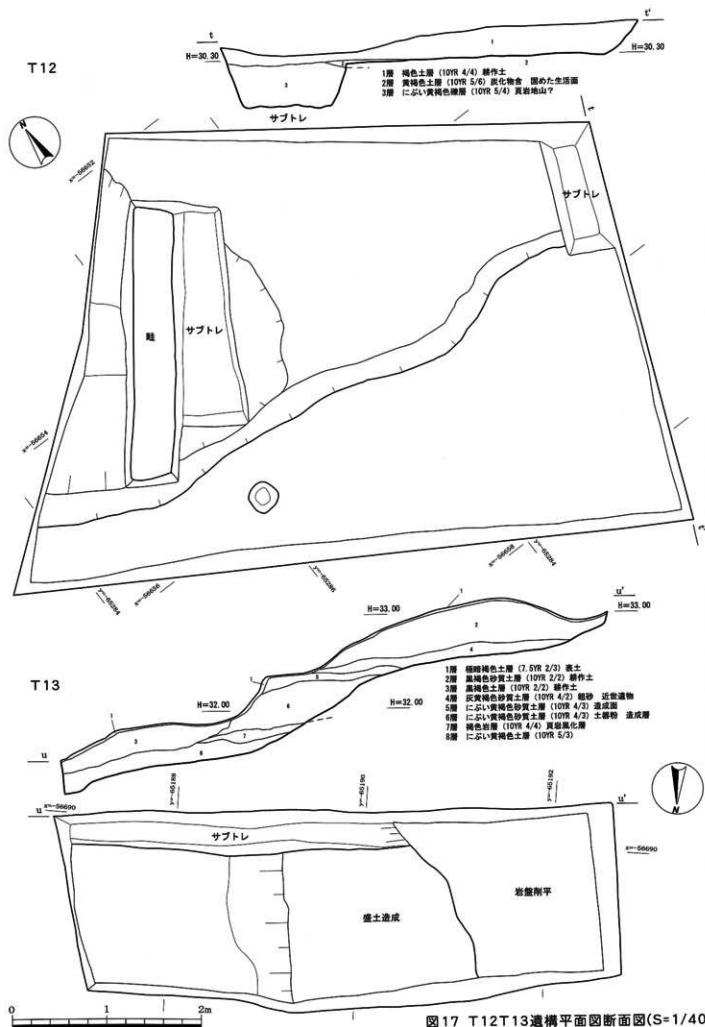
伊跡の検出、食糧残滓である貝類の出土、調理用と考えられる播鉢類の集中出土、多様な貯蔵用遺物の出土から、総合的に見て、T11は炊事場、台所跡であったと推定される。T10で検出されたSB201や202等の建物に伴う炊事場と考えられ、山城における生活空間の在り様を示す事例と言えよう。

T12

南の城丘陵の西側、曲輪2-5で掘削したトレンチ。調査前の踏査で、曲輪2-5の西北部には窪地が見られたことから、曲輪への入り口が想定され、トレンチを設定した。トレンチ南側は、黄褐色整地面（2層）が検出されたが、北側は整地面が削られ、礫まじりの層（3層）が露出している状況であった。南側の整地面では、ビット1基を検出したが、その他目立った遺構はなかった。トレンチ東側の角のサブトレから、礫まじり層は、遺物を含まない地山と判断された。入り口と思われる窪地も、3層を掘削して、形成されている可能性が高い。このことから、窪地形成の時期は決定できず、城郭の遺構とは判断できない状況であった。

T13

曲輪2-4の北東側段下に設定した調査区。現地表面の観察から、曲輪2-4へあがる斜面の立ち上がり部分で、細い溝が見られたため、横溝の有無を想定して発掘した。T09の調査で、このような溝は、表土内におさまり、耕作のための排水溝と判明したが、空堀と通路として連絡する可能性も踏まえ、T13を掘削した。



トレンチの調査から当該箇所は、曲輪 2-4 側の岩盤を削平し、その廃土を城外側に盛って、幅 3m 強の平坦面を造成していることが判明した。形成された平坦面には、遺構は見られず通路として使用されたと考えられる。図化していないが、盛り土層である 5・6 層中から土器器細片が出土しており、城時代の造成である。トレンチより北西では、通路が袋小路になっているため、通路は曲輪 2-4 に取り付く形で機能していたと考えられる。

第3節 出土遺物

T01 出土遺物 (図 18 図 19-1~4)

1 は端反りの青磁。皿か。2、3 は土師器小皿。見込の周囲が盛り上がる。4 は瓦質土器の火舎。橙色の甘い焼成で、突帯がめぐる。

T02 出土遺物 (図 18 図 19-5)

5 は瓦質土器の鉢か。内面にハケメが見られる

T03 出土遺物 (図 18 図 19-6~9)

6 は中国産の天目茶碗。口縁部付近は丸みを持って立ち上がる。南平茶洋窯の系統か。7 は龍泉窯系青磁の端反り口縁部破片。皿か。8 は、土師器杯。体部は直線的に立ち上がる。

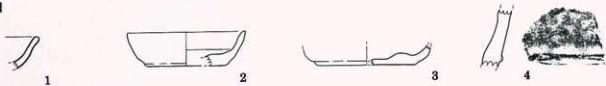
T04 出土遺物 (図 18 図 19-10~16)

10 は、華南系白磁。厚みのある口唇部の下に、波状文を施す。11 は、白磁の皿か。器壁が厚い。12 は鏡頭心の青花碗で、小野 E 碗。見込は二重圏線。16 世紀前葉~中葉。13 は土師器杯。外器面の口縁部付近は直線的に仕上げる。14・15 は中世須恵器の甕片。外面は格子叩き。16 は瓦質火舎。焼成は悪い。

T04 出土地鉄一括遺物 (図 20 図 21-17~44)

17~28 は、土師器小皿。いずれも、類似する法量で、12 点の口径平均は 7.8cm、底径 5cm、器高 2.1 cm。多くは体部から口縁にかけて外反し、口縁部は厚ぼったく丸く仕上げる。底部は、糸切り離し後そのまま、調整をしないため、立ち上がり付近に突帯が残り、粗い。17、21、27 などを見込中央が突出する。29~43 は、板状石製品。長方形、五角形、三角形など、平面形状はさまざまであるが、厚み 1cm 程度の石板になるよう意識して作られている。石材は砂岩のものが多く見られる。石への墨書等は確認できなかった。出土状況は、土師器皿の底に敷くように板石を配置するものが多く見られた。44 は瓦質の完形挿鉢である。土師器小皿や板状石製品を覆うように、伏せた状態で出土している。口唇部には、段付きが施されている。内器面には、描目が残るが、下部は使用により磨滅している。実際に、挿鉢として使用した後に、地鉄に再利用したのと考えられる。

T01



T02



T03



T04

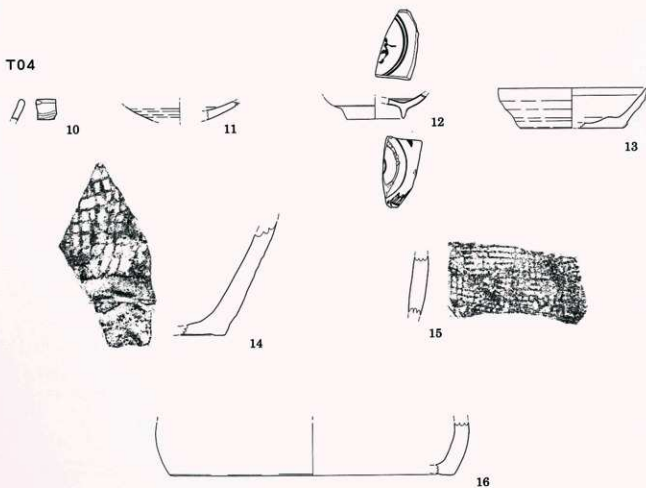
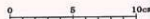
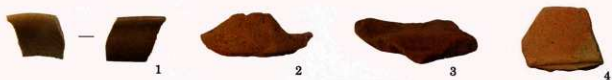


图 18 T01~T04出土遺物実測図(S=1/3)



T01



T02



T03



T04



图 19 T01~T04出土遺物写真

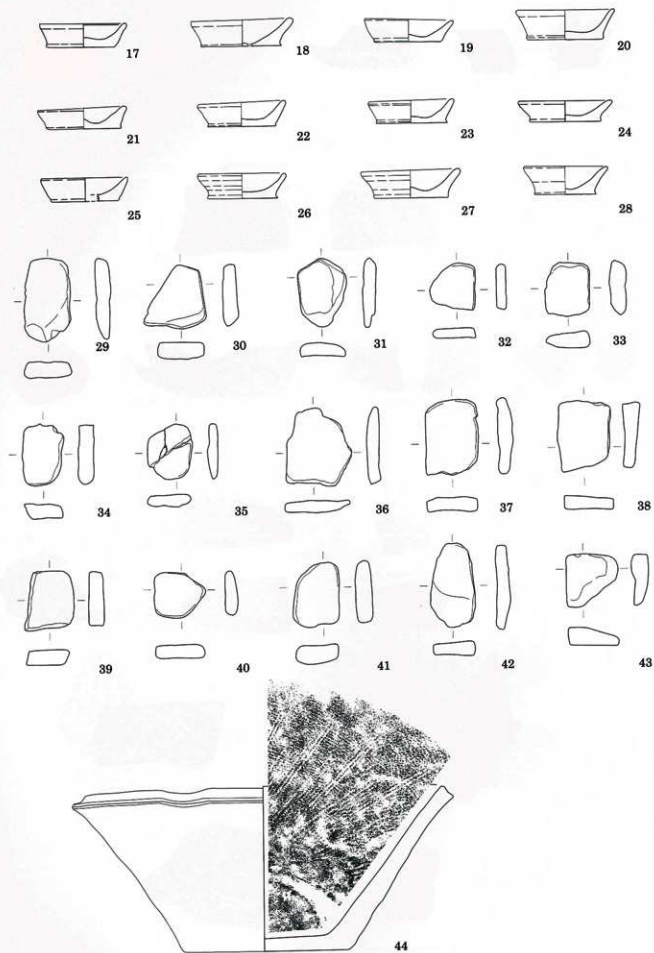


图20 T04出土地鎮一括遺物実測図(S=1/3)

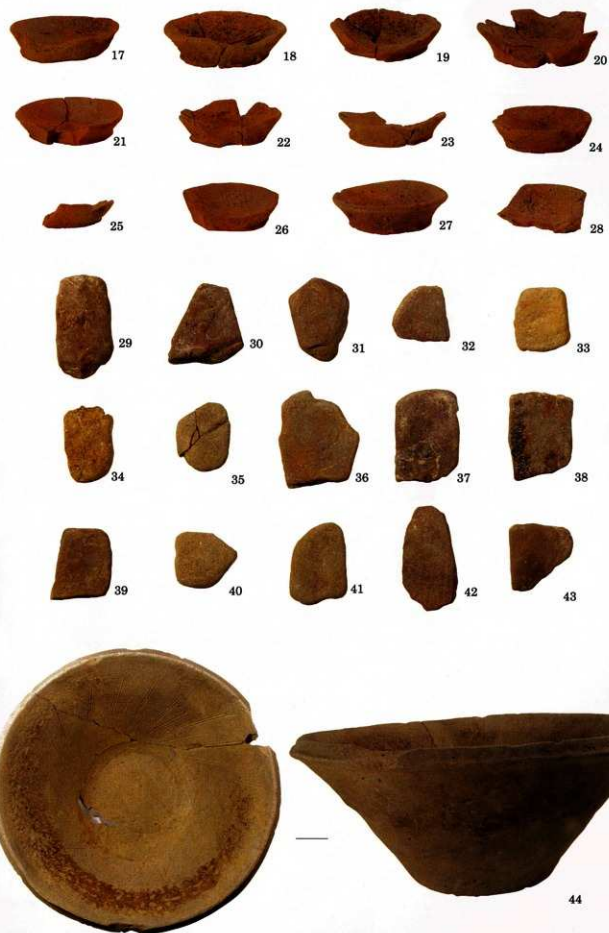


图21 T04出土地鎮一括遺物写真

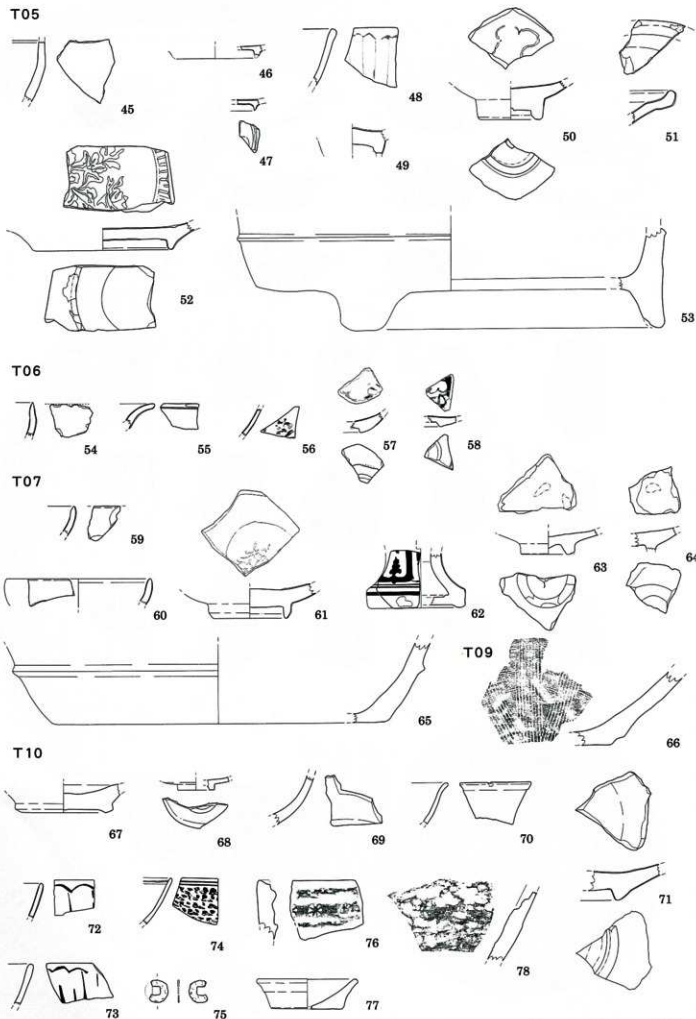


图22 T05~T10出土文物实测图(S=1/3)



图23 T05~T10出土文物写真

T05出土遺物(図22図23-45~53)

45は、中国産天目碗。46・47は、白磁皿の高台部分細片。森田E群皿。15世紀後半~16世紀中葉。48~52は龍泉窯青磁。48は剣先蓮弁文碗の口縁付近破片。49は碗の底部破片。外底無釉、高台部分は欠損。50も碗の底部。見込に幾何学文様。畳付から外底は無釉。被熱しており、器面は光沢を失っている。51は盤の口縁部。縁が直立するタイプ。52は盤の底部。見込に草花文、外底は蛇の目釉剥ぎ。53は瓦質土器で、三足の火舎。被熱して全体的に黒色を呈している。

T06出土遺物(図22図23-54~58)

54は中国産天目碗の口縁部。口縁は鋭くシャープに作る。55は龍泉窯青磁の端反皿。釉の発色が良く、エメラルドグリーンを呈す。56は景德鎮系青花碗の小片。アラベスク文が見られることから、小野分類C群ないしD群碗と思われる。15世紀後半~16世紀前半。57、58は青花蕃筍底皿の底部。58は濃紺の呉須で模様を描く。小野分類C群皿。

T07出土遺物(図22図23-59~65)

59、60は中国産天目碗の口縁部破片。61は龍泉窯系青磁碗。見込中心が円形に釉剥ぎされ、露胎に草花文がスタンプされている。高台は外側が斜めにカットされている。外底も無釉。沖繩分類のIV類か。被熱により、釉薬は白濁化し、露胎部は赤変している。14世紀中葉~15世紀初頭。62は景德鎮系青花瓶の底部。腰部を絞るスタイルの梅瓶と想定される。内面は無釉。外面には、ラマ式蓮弁が見られ、蓮弁文様が宣徳年間の資料と類似する(註1)。63は朝鮮半島産の白磁。クリーム色の釉調で、見込みに砂目か2か所見られる。高台は四角く作られ、外底中心は兜巾。64は唐津系の皿。砂目が見られる。17世紀前半の遺物で、天草島原一揆時の使用物の可能性がある。65は須恵質の火舎か鉢。青灰色を呈する。突帯がめぐる。

T09出土遺物(図22図23-66)

66は瓦質擂鉢。擂目の他に、ハケメも良く残る。堀切の埋土内から出土。

T10出土遺物(図22図23-67~78)

67は大宰府分類IV類の白磁碗。11世紀代の遺物で、上津浦城跡出土遺物の中で最も古い。アンティークとして利用された可能性がある。68は小型白磁。皿か。高台は小さな断面方形で、体部は水平に開く。高台周りは露胎。森田D群の亜種か?69も白磁碗で、下部で若干の露胎部がある。70~73は龍泉窯系青磁。70は端反りの碗か皿。71は盤で厚手の釉がかかる。見込みは無文。72、73は蓮弁文碗で、沖繩分類VI類。72は蓮弁幅が広く、73は蓮弁頭部と線部が運動していない。15世紀後半~16世紀前半。74は青花碗で、小野分類C碗。外面三つ丸文。T10北側の黄褐色土成土から出土。75

は古銭。文字の有無は不明。76は瓦質土器の火舎。77は土師器小皿。78は擂鉢。

T11出土遺物(図24-79~111、図25-79~114)

79~83は龍泉窯系青磁。81、82は蓮弁文。いずれも器形は不明ながら、沖繩分類V類であろう。15世紀前葉~中葉。83は、小型の香炉。竹筒模様であろう。84~86は白磁。84は景德鎮系青磁。森田E類。85は安定感ある高台で、見込露胎。皿であろう。沖繩分類のD'類か。86は厚手の瓶の破片で、被熱し光沢を失っている。内面はクワ痕跡が明瞭に見られる。梅瓶の可能性が高い。87~90は青花。87は漳州窯系の皿で、濁った呉須で文字のような文様が描かれる。88は小野B1群の皿で、文様は内外ともに圏線のみ。被熱している。89は小野C群の蓮子碗で、見込には法螺貝を描く。90はC群蕃筍底皿で、外面芭蕉文。やはり被熱し、器面はザラつく。青花は概ね15世紀後半~16世紀中葉までのものと考えられる。91・92は同一個体と思われる薄手の袋物。褐釉が施される。中国産の小壺か。同じく被熱し、器面は荒れている。93は中国または東南アジア産と思われる焼き締め陶器の四耳壺。砂粒の多い胎土である。94も焼き締められた壺で、円盤状に張り出す底部となる。底部胎に目積みのような突起物がある。95は備前焼甕の口縁部。折り返し口縁。96は唐津系の蕃筍底皿の皿。低く目立たない高台が付いている。外底は露胎。見込に残る痕跡は、胎土目と思われる。16世紀末~17世紀前半。97は須恵器甕片。格子叩き。98~102は擂鉢の破片。すべて、T11東北の伊跡付近からまともに出て出土している。98は擂目の溝が深く、底部が薄手につくられる。天草ではあまり見ないタイプの擂鉢である。99は灰色の擂鉢で、擂目は使用により磨滅が著しい。100は瓦質の擂鉢。破片下部に若干の擂目痕跡がある。被熱により、内外面とも器面の凹凸が著しい。101は口縁部。擂目が口縁付近まで残り、クロスしている。102は被熱で焦げ茶色になる。103は土師器杯。口縁は薄く仕上げる。104も土師器で、小皿と杯の中間程度の份量。体部は途中で屈曲し立ち上がる。白磁D群と類似するプロポーション。105~110は土師器小皿。110は立ち上がり直線的。111は土師器小杯。112~114は貝殻。伊跡周辺の堆積層から出土しており、食糧残滓と思われる。112はウミギク、113・114はヤコウガイである。

註1 景德鎮系青花瓶の特徴、年代観については、専修大学高島裕之氏からご教示を賜った。

T11

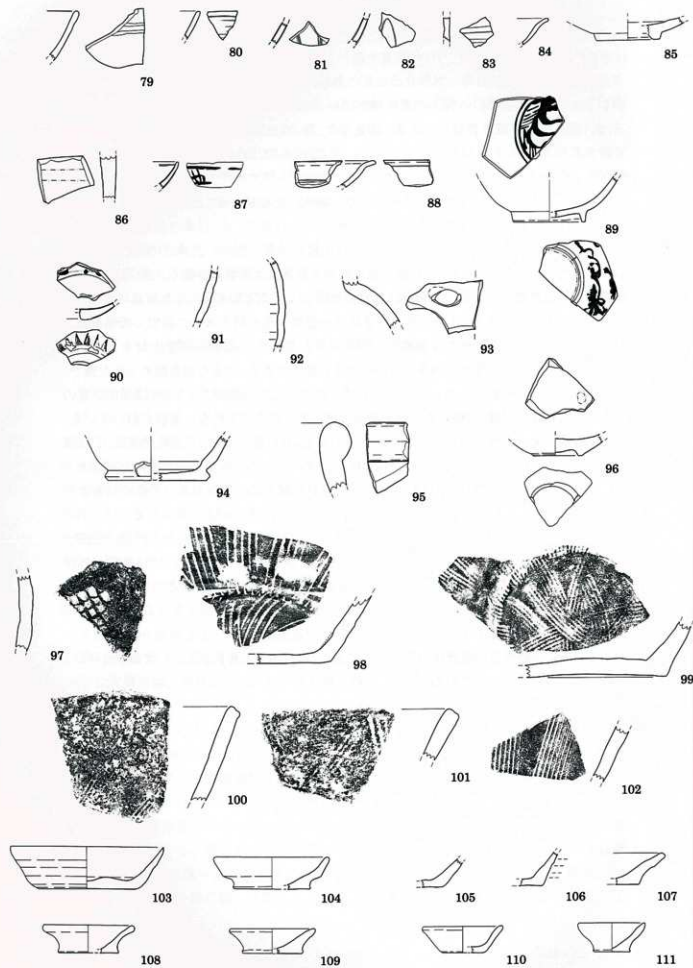


图24 T11出土遺物実測図(S=1/3)

T11



图25 T11出土遺物写真

第4章 動物遺存体および白色物質に関する自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上津浦城跡（熊本県天草市有明町上津浦に所在）は、戦国時代の天草を治めた天草五人衆の一人で、キリシタン領主として知られる上津浦氏の居城とされる。今回、南の城における発掘調査で、T04の地鎮遺構と考えられる盛土中から伏せた状態の完形播り鉢、その下側や周囲に散在する土師器とともに動物遺存体（主に骨）、起源不明の白色物質が出土した。

そこで、骨の種類を明らかにするために骨同定、また白色物質の素材を明らかにするために表面の微細構造の観察、X線回折分析、薄片作成鑑定、植物珪酸体分析を実施した。

1. 動物遺存体の同定

1. 試料

試料は、T04粗砂層から出土した骨・歯牙の破片13点（番号1～13）である。いずれもクリーニングされた状態にあった。試料の詳細は、結果表に併記する。

2. 分析方法

試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。

3. 結果

結果を表3に示す。骨・歯牙の破片は哺乳綱(Mammalia)ウシ目(Artiodactyla)ウシ科(Bovidae)ウシ(*Bos taurus*)のものである。参考資料としてウシの骨格各部位の名称を図に示す。

左右頭蓋骨片、右上顎第2後臼歯、第1後臼歯の可能性がある右上顎歯牙片、下顎歯牙が確認される。なお、右上顎第2後臼歯は臼歯高19.29mm、歯冠幅26.26mm、歯冠厚22.49mmを測る。

この他、ウシの可能性がある上顎骨/下顎骨・頭蓋骨、その他に種類や部位の不明な破片が見られる。

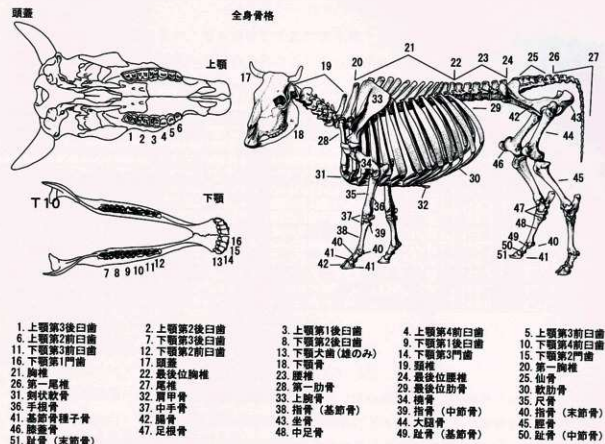


図26 ウシ骨格各部の名称

(原図は、全身骨格・脳頭蓋が加藤・山内, 2003、下顎骨が久保・松井, 1999による)

表3 骨固定結果

番号	出土地点	試料名	種類	部位	左	右	部分	数量	備考
1	T04 粗砂層出土	骨片1	ウシ	上顎第2後臼歯	右	腭突	1		臼歯高19.23,歯冠幅26.26,歯冠厚22.49
2	T04 粗砂層出土	骨片1	ウシ	頭蓋骨	右	破片	1		
3	T04 粗砂層出土	骨片2	ウシ	上顎歯牙	右	破片	1		第1後臼歯?
4	T04 粗砂層出土	骨片2	ウシ	頭蓋骨	左	破片	1		
5	T04 粗砂層出土	骨片3	ウシ	下顎門歯		破片	1		
6	T04 粗砂層出土	骨片3	哺乳類	不明		破片	1		
7	T04 粗砂層出土	骨片4	哺乳類	不明		破片	1		
8	T04 粗砂層出土	骨片5	ウシ	上顎骨/下顎骨		破片	1		
9	T04 粗砂層出土	骨片9	ウシ?	頭蓋骨		破片	1		
10	T04 粗砂層出土	骨片7	ウシ?	頭蓋骨		破片	1		
11	T04 粗砂層出土	骨片8	哺乳類	不明		破片	1		
12	T04 粗砂層出土	骨片9	ウシ	下顎門歯		破片	1+		
13	T04 粗砂層出土	骨片10	哺乳類	不明		破片	1		

4. 考察

確認された種類は、ウシであった。また種類・部位不明な骨片も同一箇所から採取されている点を考慮すると、おそらくウシに由来するとみられる。

広岡・川田(2013)によると、ウシの文化はヒトが作った乳・肉・役・皮などを利用した生活・生産・技術・娯楽・芸能・進歩といった物心両面で生み出されたといわれている。また松井(1997)によれば、ウマ・ウシの出土例を整理・分類すると自然死・事故死、屠殺、犠牲に分類できるとしている。今回出土したウシは伏せた完形の播り鉢とともに出土している。四肢骨などが見られないことから、頭蓋のみが播り鉢とともに存在し、祭祀的な意味合いを持っている可能性がある。また脱臼が進んだ歯牙であることから、老齢個体であったと考えられる。

II. 白色物質に関する調査

1. 試料

分析に供した試料は、T04で播鉢の下に位置する土師器皿やその周辺、骨片に付着していた白色物質である。発掘調査時には、発掘担当者により14点(試料番号14~28)が採取された。この中から、白色物質の表面構造を観察するために、マイクロスコブ観察で2点(試料番号14:白色物質1, 試料番号19:白色物質6)を選択した。また、試料番号14(白色物質1)についてX線回折分析、薄片作製と観察、植物珪酸体分析を実施した。

なお分析計画を検討した当初は、白色物質の由来が炭酸カルシウムなどの鉱物と想定されたことから、鉱物の種類を特定し濃度を測定できる蛍光X線分析の実施を予定して

いた。しかし、白色物質の一部を採取して鉱物顕微鏡で観察したところ、多くの植物珪酸体やそれを含む珪化組織片が認められたことから、植物珪酸体分析を実施することとした。

2. 分析方法

(1) マイクロスコブ観察・写真撮影

キーエンス社製のマイクロスコブVHX-1000を用いて、試料を観察、写真撮影を行う。

(2) X線回折

試料を切断機により切断・整形した後、乾燥器において60℃以下の温度で24時間乾燥する。乾燥した試料はメノウ乳鉢を用いて微粉砕し、測定用のアルミホルダーに充填して測定用試料とする。作成したX線回折測定試料を以下の条件で測定する。

装置: 理学電気製 MultiFlex Divergency Slit: 1°
 Target: Cu (K α) Scattering Slit: 1°
 Monochrometer: Graphite 湾曲 Receiving Slit: 0.3mm
 Voltage: 40KV Scanning Speed: 2°/min
 Current: 40mA Scanning Mode: 連続法
 Detector: SC Sampling Range: 0.02°
 Calculation Mode: cps Scanning Range: 2~61°

測定回折線の主要ピークと回折角度から原子間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を、JCPDS (Joint Committee on Powder Diffraction Standards) のPDF (Powder Data File) をデータベースとしたX線粉末回折線解析プログラムJADEにより検索して同定する。

(3) 薄片作製鑑定

薄片観察は、試料を0.03mmの厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

試料は、ダイヤモンドカッターにより15×30×15mm程度の直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップを#180~#800の研磨剤を用いて研磨した後、プレパラートに貼り付ける。プレパラートに貼り付いた試料を厚さ3mm程度に切断した後、#180~#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。

薄片は、偏光顕微鏡下において観察する。構成物の量比は、薄片上の観察面全体に

対して、多量 (> 50%)、中量 (20 ~ 50%)、少量 (5 ~ 20%)、微量 (< 5%) および極めて微量 (< 1%) という基準で、目視により判定し、構成物の量比を表に示す。代表的な個所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行う。

(4) 植物珪酸体分析

前述のように、白色物質中には植物珪酸体やそれを含む珪化組織片が認められた。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や擾乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰や炭化物、植物遺体には珪化組織片などの形で植物珪酸体を含む組織構造が残されている場合がある (例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社, 1993)。

今回の調査では、薄片を観察して植物珪酸体や珪化組織片の含有状況を確認する。また補足的に白色物質を蒸留水で溶いて、分析残渣を得た。これを400倍の光学顕微鏡下で観察し、近藤 (2010) を参考にして調査する。

3. 結果

(1) マイクロスコープ観察

・試料番号 14 (白色物質 1)

ベージュ色を帯びる基質が主体を占めており、白色部～灰色を帯びる部分を少量伴う。基質は粘土から構成されており、表面に微細な孔隙が散在する (最大径 3mm 程度)。孔隙の形状は粒状や泡状あるいは不定形状である。

また表面には、植物に由来すると考えられる、繊維状の構造が散点して分布する。

・試料番号 19 (白色物質 6)

ベージュ色を帯びる基質は粘土で構成される。径 0.6mm 程度の孔隙周辺に、盛り上がり状の構造が認められる。この他に微細な孔隙、粒状や泡状、柱状～パイプ状の構造も散在する。

また、この試料の表面にも植物に由来すると考えられる、繊維状の構造も認められる。

(2) X線回折

X線回折チャートを図 27、検出鉱物を表 4 に示す。

図中の最上段が試料の回折チャートであり、下段が同定された結晶性鉱物もしくは化合物の回折パターンである。検出鉱物の量比は、最強回折線の回折強度 (cps) から多量 (> 5000cps)、

表4. X線回折分析による検出鉱物

試料名	検出鉱物		
	石英	斜長石	10A型ハロイサイト
白色物質1	△	±	±

量比 ◎:多量, ○:中量, △:少量, ±:極めて微量

中量 (2,500 ~ 5,000cps)、少量 (500 ~ 2,500cps)、微量 (250 ~ 500cps)、極めて微量 (< 250cps) という基準で判定する。回折チャートの同定に使用した PDF データの鉱物名 (鉱物) は括弧内に記している。

試料番号 14 (白色物質 1) からは、少量の石英 (quartz) および極めて微量の斜長石 (albite)、10A型ハロイサイト (halloysite-10A) が検出される。10A型ハロイサイトは 4.4 Å (2θ : 20°) 付近や 2.57 Å (2θ : 35°) 付近に微弱な回折線を示すが、10A (2θ : 8.8°) 付近に回折する (001) 面反射はさらに弱く、不明瞭である。

なお、2θ で 16 ~ 33° 付近にかけてバックグラウンドの盛り上がりが生じている。これは、火山ガラス等の非晶質物質による干渉性散乱に起因していると考えられる。

(3) 薄片作成鑑定

構成物の量比を表 5 に示す。また、薄片内の代表的な 2ヶ所について下方ポーラーおよび直交ポーラー下での状態を写真撮影し、図 28・29 に示す。

試料番号 14 (白色物質 1) には、砂礫サイズの粒子を微量に含むシルト質粘土が見られる。散らされる砂礫は微量の鉱物片、極めて微量の岩片、微量の土器片、その他の微量の碎屑片などから構成される。鉱物片は石英が主体となっており、その他に斜長石、白雲母、角閃石なども認められる。岩片は石英、セリサイト、長石類、不透明鉱物などからなる原岩不明の変質岩である。土器片は径 1 ~ 5mm 程度で細粒砂～中粒砂を含み、基質は褐色粘土や雲母鉱物などから構成されている。その他の碎屑片としては植物珪酸体、火山ガラス、炭質物などが極めて微量認められる。

試料の基質は淡褐色粘土、セリサイト、炭質物、植物珪酸体などから構成される。基質の大部分を構成する淡褐色粘土はほとんど非晶質であるが、一部に結晶質な部分もある。この結晶質な部分は、X線回折分析の結果を考慮すると、10A型ハロイサイトと見ることができ。植物珪酸体や炭質物は、砂粒サイズのものも認められるが、シルトサイズのものも主体となっており、砂粒サイズのものも含めて少量程度である。X線回折分析において認められた干渉性散乱は、火山ガラスよりも多く含まれる植物珪酸体による影響と見ることができる。基質には、この他に径 0.1 ~ 2mm 程度の孔隙が少量程度、認められる。孔隙は、球状～不定形状を呈して散在しており、壁の部分が粘土鉱物化しているが、充填鉱物は存在しない。

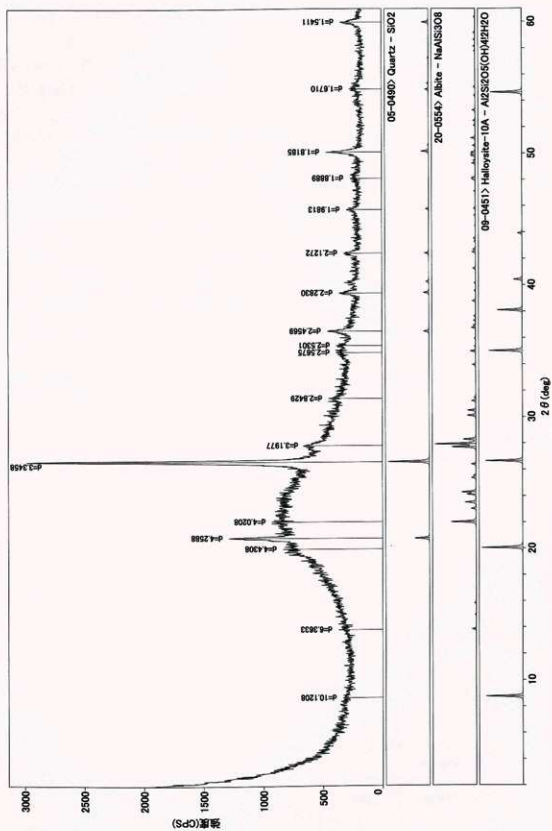


図27 白色物質の不定方位法X線回折パターン

表5. 薄片観察による構成物量比

試料名	鉱物片				岩片 変質岩	その他			基質		
	石英	斜長石	白雲母	角閃石		火山ガラス	植物珪酸体	炭質物	土器片	シルト・粘土	植物珪酸体
白色物質1	+	±	±	±	±	±	±	+	◎	+	+

量比 ◎:多量(>50%) ○:中量(20~50%) △:少量(5~20%) +:微量(<5%) ±:きわめて微量(<1%)

(4) 植物珪酸体分析

薄片中には多くの植物珪酸体、特に機動細胞珪酸体が認められる。その形態的特徴から、栽培植物であるイネ属の葉部に形成される機動細胞珪酸体と判断される。また、機動細胞珪酸体が5個程度から20個程度まで列を成す珪化組織片も見られる。生育中の植物体内では数百~千個単位で並ぶことから、確認された珪化組織片は細分された形で白色物質中に混入していると言える。さらに、葉部に形成されるイネ属の短細胞列もわずかに認められる。

分析残渣の光学顕微鏡による観察でも、イネ属の機動細胞珪酸体や珪化組織片が数多く認められる。また、短細胞列とともに穎(穎)に形成される穎珪酸体もわずかに認められる。

4. 考察

(1) 白色物質の表面構造

白色物質の表面は白色部~灰色を帯びる粘土や植物に由来すると考えられる繊維の集まりで構成される。または粒状や泡状あるいは不定形状の構造や孔隙が見られ、一部には柱状~パイプ状の構造も見られる。これらの点から、白色物質は粘土により粘性を強く持ち、掻き混ぜられるなどすることで多くの泡が形成され、固化する過程で泡の形状が残され、また一部は壊れて空隙になったと思われる。ただし、赤色化など被熱の痕跡が見られないため、固化の過程で熱を受けたことは考えにくい。

(2) 構成物

白色物質は、10A型ハロイサイトを含む淡褐色粘土、セリサイトなどから構成される基質に、シルト質粘土が見られるとともに、微量の鉱物片、極めて微量の岩片、微量の土器片、その他の微量の碎屑片、火山ガラスなどが含まれていた。ハロイサイトやセリサイトは、天草陶石にも見られる粘土鉱物である。また土器片の存在からは、土器を破砕して粉末化して用いた可能性や材料のひとつとなった堆積物が集落内や付近から持ち込まれた

可能性が示唆される。なお、集落周辺に形成される土壌には人間の活動に伴う有機的な汚濁が影響して、土色が暗色になる傾向が見られる。この点を考慮すれば、集落周辺で特に白色を呈する堆積物が選択的に利用された可能性が考えられる。

また白色物質内には、栽培植物であるイネ属の葉部や穎に形成される植物珪酸体やそれらを含む珪化組織片が認められた。これらは炭化物を伴わないことから、蒸し焼きのような状態ではなく、酸素が十分な中で燃焼して灰となったことがうかがえる。なお珪化組織片が細分された形であることから、白色物質に混入する前あるいは混入後に、手で捏ねるなどして灰が強く混ぜられるような状態になったと思われる。

(3) 由来について

T04の地鎮遺構で見られた白色物質には、その様相から漆喰の可能性が推定されるが、水酸化カルシウム・炭酸カルシウムに特徴づけられるような結果を確認できなかった。また、製壺時に本試料に類似する付着物が確認されることもあるが、分析結果からはその傾向を見出すことは出来なかった。

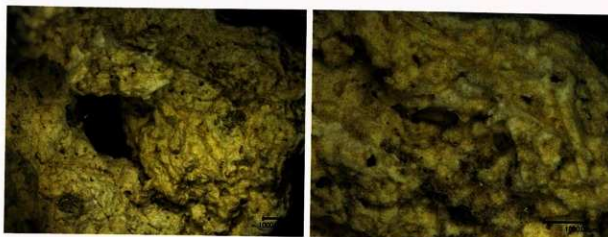
材料のひとつとしては、稲藁や稲初殻の灰が利用された可能性が高い。灰を溶いた灰汁からは、アルカリ成分が得られ、コンニャクを製造する際に用いることがある。あるいは、イネ科植物の灰はそれ自体が高純度の二酸化ケイ素であり、陶芸の釉薬として利用される場合もある。

このほか、周辺に分布する堆積物や土器に由来する碎屑物が混入していることが確認できたが、このことから特徴づけられる用途を想起することが出来ない。

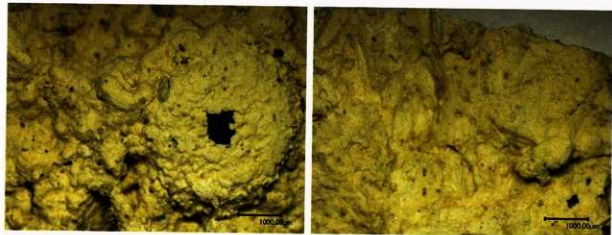
今回は地鎮遺構に伴うものであり、これらの用途とは直接的に結びつくものではなく、今後さらに、周辺での類例を含めて検討する必要があるだろう。

引用文献

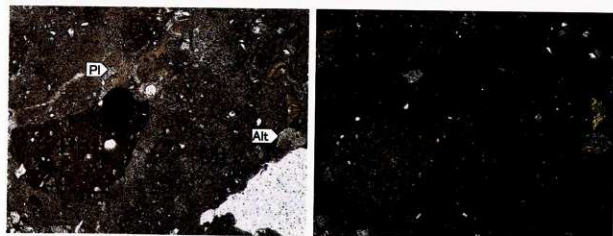
- 広岡博之・川田啓介, 2013, ウシと日本人. シリーズ「家畜の科学」1 ウシの科学, 広岡博之編, 朝倉書店, 26-29.
 近藤嘉太郎・山内昭二, 2003, 新編 家畜比較解剖図説 上巻. 養賢堂, 315p.
 加藤謙三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
 久保和士・松井章, 1999, 家畜その2ーウマ・ウシ. 西本豊弘・松井章編, 考古学と自然科学② 考古学と動物学, 同成社, 169-208.
 松井章, 1997, 考古学からみた動物利用. 部落解放なら, 8, 奈良県部落解放研究所, 2-31.
 バリノ・サーヴェイ株式会社, 1993, 自然科学分析からみた人々の生活(1). 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, 慶應義塾, 347-370.



1.白色物質1 (T04 埋納土師器皿) マイクロスコブ



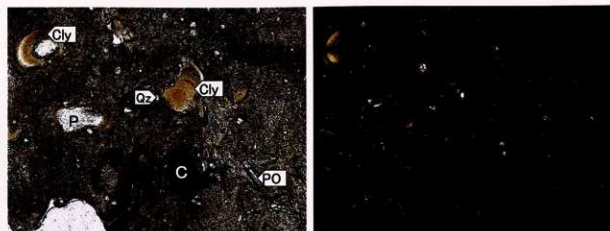
2.白色物質6 (T04 埋納土師器皿) マイクロスコブ



3.薄片 白色物質1 (T04 埋納土師器皿)

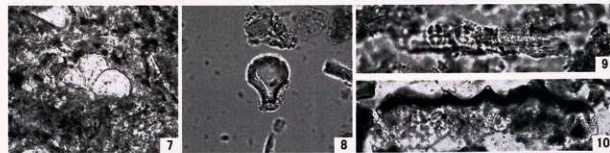
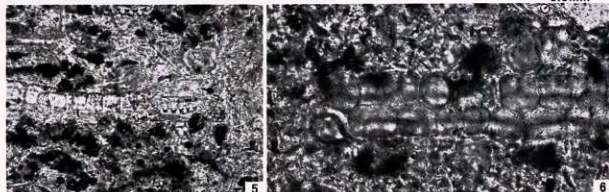
Pl:斜長石, Alt:変質岩, Pot:土器片, Mtx:基質.

0.5mm



4.薄片 白色物質1 (T04 埋納土師器皿) 下方ポーラー
Qz:石英, Clv:粘土鉱物, Po:植物珪酸体, Mtx:基質, P:孔隙

直交ポーラー
0.5mm
0.5mm



5.イネ属機動細胞列(T04 埋納土師器皿; 白色物質:薄片内)
6.イネ属機動細胞列(T04 埋納土師器皿; 白色物質:薄片内)
7.イネ属機動細胞珪酸体(T04 埋納土師器皿; 白色物質:薄片内)
8.イネ属機動細胞珪酸体(T04 埋納土師器皿; 白色物質:処理残渣)
9.イネ属短細胞列(T04 埋納土師器皿; 白色物質:処理残渣)
10.イネ属短細胞珪酸体(T04 埋納土師器皿; 白色物質:処理残渣)

50µm 50µm
(5,7) (6,8-10)

図29 白色物質分析写真・植物珪酸体顕微鏡写真

第5章 正覚寺キリシタン墓碑群の調査成果

第1節 調査の概要

正覚寺は、有明町上津浦に所在する近世寺院で、正保3年(1646)に開基された。上津浦城跡の北側に位置する。南蛮寺跡に建立された伝承があり、江戸時代には付近で聖母子像大型メダイも発見されている。昭和60年の本堂解築工事の際に、地下からキリシタン墓碑が発見され、伝承を裏付けた。今次調査では、上津浦城跡調査の一環として、キリシタン墓碑3基(半円柱伏碑型2基、偏平伏碑型1基)及び水輪の実測調査を行った。なお、調査の実施にあたっては、正覚寺のご協力を賜った。深く感謝申し上げます。

第2節 実測対象墓碑

1 偏平伏碑型墓

長辺約64cm、短辺約35cm、高さ19cm、中央に「一」状の浮彫。左側面は、フレア状の装飾を行い、右側面は浮彫も含めて、断裁される。浮彫はギリシヤ十字のような十字架になる可能性が高い。短辺が35cmであることから、本来の墓石が分割されたものである。

2 半円柱伏碑型1号墓

奥行約54cm、幅約51cm、高さ約34cmで、正面中央には二支十字とIHS紋章、右には「大つきんた一日」と読める印刻、左には「慶長十一年」「一月□□日」の印刻がみられる。慶長十一年は1606年で、キンタは女性の洗礼名と思われる。「大つ□」は名字の可能性が高い。正面小口は縁取りとして突帯がある。背面は断裁され、縁取りがない。

3 半円柱伏碑型2号墓

奥行約52cm、幅約51cm、高さ約34cmで、1号墓とほぼ同じ法量である。正面中央には二支十字とIHS紋章のみ残り、やはり正面小口は縁取りとして突帯があるが、背面は断裁され、縁取りがない。本来は、1号墓と一体であったものが、分割されたものである。

4 五輪塔水輪

直径約56cmの球体。梵字は正面がハ、左面がパー、奥面がバン、右面がバクで、いずれも深く幅を持った字体で梵字が掘り込まれている。鎌倉～南北朝時代のものか。



正覚寺キリシタン墓碑群

第6章 総括

第1節 縄張りの特徴

上津浦城跡を構成する南北丘陵は、発掘調査により、いずれも城郭遺構であることが明らかにになった。いずれの城での調査においても、しっかりと遺構・遺物が残存しており、保存状態は良好であった。

南の城では曲輪 1-4 で建物跡 SB101、北の城では曲輪 2-2 で SB201・SB202 の建物跡がそれぞれ検出され、両城で建物を構築していたことが明らかになった。また、いずれの城でも少なくない出土遺物が見られ、14 世紀から 16 世紀にかけて、生活が営まれていたことが判明した。

このことから、並列する 2 か所の城郭は、同時期に使用され、機能していたことが証明された。北の城・南の城は、上津浦城として包括される構造であったと考えられる。また、従来は、調査担当者自身も、地形の機微に乏しく曲輪平面が広い南の城が「居館」、高さのある切岸を誇り中世城郭然としている北の城が「戦いの場」という漠然とした認識を有していたが、今回の調査により、いずれの城でも、似たような日常生活空間があったことが明らかになった。特に北の城、T10・T11 の館と炊事場跡の検出からは、北の城も恒常的な生活をしてきたことが証明され、同クラスの領主層がそれぞれの城で、居館を構えていた可能性が高くなった。

このように考えると、南北に分かれている城郭は、同じ上津浦氏で、例えば兄弟のような、それぞれに一定の独立性を持った城主が別々に城郭を構えていた姿が見えているのかもしれない。

上津浦氏に関する記録の中で、天文 12 年 (1543) に上津浦千手と上津浦孫次郎という人物がおり、それぞれに相良氏と接触している記載や翌天文 13 年 (1544) 2 月 4 日に「上津浦親類中、上津浦下城」、2 月 6 日に「種教、上津浦下城」と一族が城から下りるといふ表現がある記載等と南北に両立する城の状況に因果関係があるように思われる。

第2節 検出遺構について

南の城では、T 03・T 04 で、城外側へ向かって、造成を行っている状況が見られた。このような造成は、北の城でも T 10 や T 13 で確認できている。盛り土による曲輪面の造成は、いずれの城郭でも頻繁に行われていたことが明らかである。その際に、T 04 で出土したように地鎮の祭祀を行っていたことがわかる。

T 06 では、3 間×5 間以上となる掘立柱建物跡を検出した。建て替え等は行われていないようであり、存続時期は明瞭ではない。南の城では、主郭にあたる曲輪 1-1 が長大で、T01 や T02 のみでは、空間の利用状況までは判明しなかった。将来の調査で、建物跡などが発見される可能性が高い。

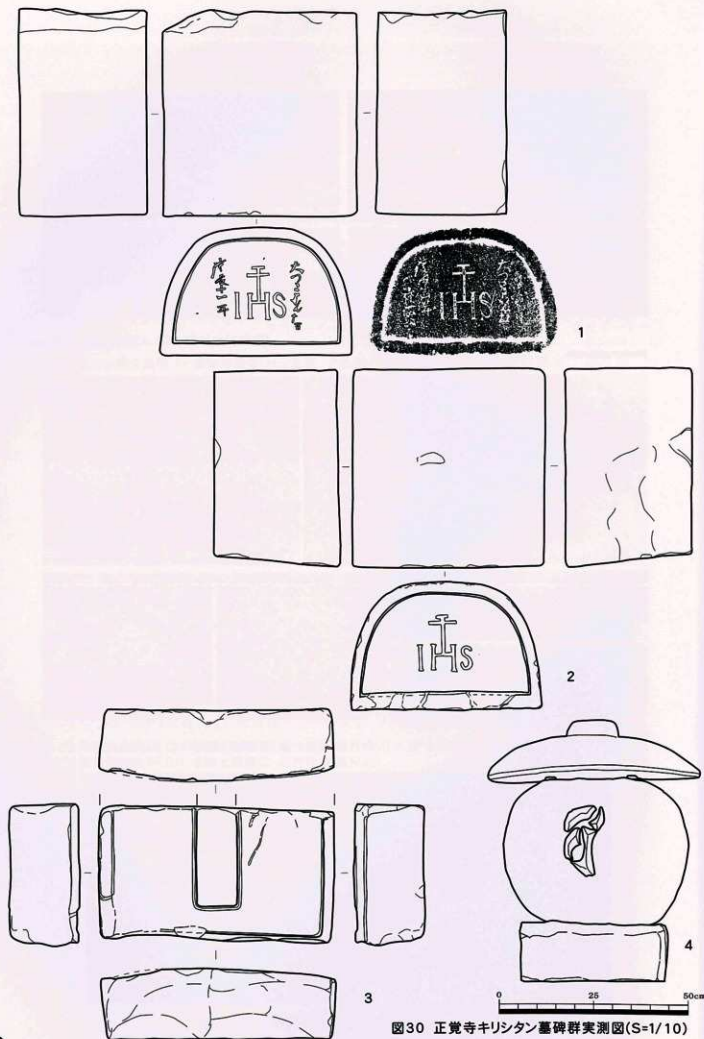


図30 正覚寺キリシタン墓碑群実測図(S=1/10)

T07からは、細い通路状の遺構及び石積遺構を検出した。防御的な意図よりも、南側の斜面を保護する土留めである可能性が高い。検出された石積は、幅約1mで、4段程度であるが、石のみから成る積み上げではなく、間に緩衝土を入れ込む積み方であった。構成石材のいくつかは、石の断面を見せる形で積んである。城郭が、基本的に海に近い低丘陵に築かれ、人里からさほど遠くない天草では、自然の石材も豊富で、中世城でも石の利用が頻繁に行われたと思われる。T07の遺構、そのような城づくりの姿の一端を表していると思われる。

北の城、T09では尾根に直交する堀切を検出したが、箱堀で底面は平滑である。尾根の遮断機能も十分とはいえず、通路としても利用されたようである。この通路は、T13の通路とつながるものであろう。中心部の切岸で守られた曲輪以外は、出入りの制限が厳重には見えない。天草諸島の縄張りの特性であろうか。

T10ではSB201からSB202へ建て替えられたことが判明した。先の曲輪拡張の造成と関係していると思われる。そのT10の建物に付随する形で、南側のT11で炊事場跡と考えられる炉跡が検出された。トレンチ際だったためか、炉跡は1基だけであったが、付近に埋没している可能性が高い。炊事場跡としては、炉跡の存在に加え、調理具である播鉢の集中出土や食糧残滓である貝類の出土、破片資料が多いが野蔵具陶器の出土から判断した。概ね、酒飯論絵巻に見られる調理場の様子と合致する。国人領主クラス城館における生活空間の利用形態の資料となるのではないだろうか。

第3節 出土遺物について

上津浦城跡の調査では、土師器類、貿易陶磁器類、瓦質土器など多様な遺物が出土した。全体の点数としては、無論、土師器破片が多いが、次いで龍泉窯系青磁片が多い。特徴のない細片が多かったため、報告できなかったものも多くある。また、やはり小片が多いが、天目茶碗も相対的に多く出土している。全て中国産で、瀬戸窯産は見られなかった。

希少なものとして、T07から出土した景德鎮窯系梅瓶底部の破片が挙げられよう。九州の城館遺跡では、各所で希少価値が高い貿易陶磁器の破片が出土するが、本例も同様のものである。また、地鎮遺物として出土した播鉢・土師器小皿・板石は、一括遺物として資料価値が高い。今後、地域の土師器皿編年が進み、年代の絞り込みが可能になることが期待される。

なお、本報告書では、担当者の力量不足により、出土遺物全体の数量カウント、分類表作成、組成特性の分析が出来なかった。後日、改めて分析を行い、担当者としての責務を果たしたい。

写真図版①



T01発掘状況



T02発掘状況



T03発掘状況



T04発掘状況



T03出土土留め石列



T04 地鎮遺物 播鉢取り上げ後の出土状況

写真図版②



T05発掘状況全景



T05遺構検出状況



T06発掘状況 SB101



T07発掘状況全景



T07検出石積遺構

写真図版③



T09発掘状況 空堀検出



T09空堀と曲輪の関係



T10発掘状況 SB201・SB202



T10 検出の岩盤掘り込みピット



T10 造成土青花碗出土状況



T11 発掘状況



T11 青花出土状況



T11 炉跡・播鉢出土状況



T12 発掘状況



T13 通路状平坦面検出状況



発掘調査現地説明会の様子

報告書抄録

ふりがな	こうつうらじょうあと							
書名	上津浦城跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	天草市文化財調査報告書							
シリーズ号	第5集							
編著者名	編著 中山 圭							
編集機関	天草市教育委員会							
所在地	〒863-0048熊本県天草市中村町10番8-1号							
発行年月日	2016年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
上津浦城跡	熊本県天草市 有明町上津浦	43215		33° 28' 10"	130° 18' 17"	平成25年1月15日 ～ 平成26年3月31日	南の城 110㎡ 北の城 135㎡	市内重要遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上津浦城跡	中世城館	室町時代 ～ 戦国時代	建物跡・堀切・石積・ピット・炉跡等	土師器皿・坏・貿易陶磁(青磁・白磁・青花・施釉陶器)・瓦質土器・中世須恵器・石製品・貝殻等	
要約	<p>上津浦城跡は天草上島の代表的な中世城館遺跡であり、戦国時代の天草に割拠した天草五人衆の一人、上津浦氏の代々の居城である。</p> <p>現在は、利用されていない隣接する二丘陵が城跡とされる。</p> <p>市内重要遺跡確認調査の一環として、両丘陵に合計13カ所のトレンチを設定し発掘調査を行い、いずれの丘陵も良好に遺構が残存していることが確認された。戦国時代の上津浦氏は、独立した丘陵をそれぞれ曲輪として利用したことが明らかになった。</p> <p>関連文化財として、近隣に所在する正覚寺キリシタン墓群群実測図も併せて掲載している。</p>				

天草市文化財調査報告書第5集

上津浦城跡1

2016年3月31日発行

編集：天草市観光文化部文化課

〒863-0048 熊本県天草市中村町10-8-1

TEL 0969-23-1111 (代表)

発行：天草市教育委員会 〒863-0048 熊本県天草市中村町10-8-1

印刷：(有)天草民報社